



日本乳幼児教育学会 第35回大会
35th The Japanese Society for Education of Young Children

大会プログラム



保育にまつわる「環境」の問い直し

2025年12月13日^土・14日^日

会場

西南女学院大学

日本乳幼児教育学会



The Japanese Society for Education of Young Children

第35回大会 大会プログラム

2025年12月13日（土）・14日（日）

西南女学院大学

後援：福岡県私立幼稚園振興協会・福岡県保育協会

北九州市私立幼稚園連盟・北九州市保育所連盟

協賛：北九州市、（公財）北九州観光コンベンション協会

目 次

日本乳幼児教育学会第35回大会の開催にあたって	1
日本乳幼児教育学会 大会の歩み	2
大会プログラム	4
大会日程	5
会場・教室一覧	6
西南女学院大学 交通アクセス・構内マップ	7
大会参加者の皆様へ	8
発表者・登壇者の皆様へ	10
研究発表座長の皆様へ／Free Wi-Fi について	11
教育ミーティング	12
チャペルアワー	14
基調講演	15
学会企画シンポジウム	16
大会企画シンポジウム	18
自主シンポジウム題目	32
研究発表（口頭発表）題目	37
研究発表（ポスター発表）題目	51
協賛団体	60

日本乳幼児教育学会第35回大会の開催にあたって

日本乳幼児教育学会第35回大会実行委員長

上 村 眞 生（西南女学院大学）



2025年12月13日・14日の二日間、日本乳幼児教育学会第35回大会を西南女学院大学にて開催する機会をいただきました。現在、実行委員一同、北九州の地に皆様をお迎えするための準備を進めております。

今大会のテーマは「保育にまつわる『環境』の問い直し」といたしました。わが国の乳幼児期の教育・保育は、「環境を通して展開する」ことが基本理念として位置づけられているように、保育実践において「環境」はきわめて重要な要素です。さらに、保育にまつわる「環境」には、物的・人的な保育環境、保育内容環境、環境教育に関わる視点など、多様なレイヤーが複雑に重なり合っています。本大会では、こうした多面的な「環境」を改めて問い直し、保育のこれからをともに考える場としたいと考えています。

開催地である北九州市は、次世代育成環境ランキングにおいて政令市14年連続1位を獲得し、環境未来都市としても世界的に注目されている、子育て・環境の分野で先進的な取り組みを進めてきた都市です。その特色をふまえ、本大会では、北九州近隣の保育者養成校が連携して実行委員会体制を組みました。開催校の西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部に加え、九州産業大学、九州女子大学・九州女子短期大学、九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学、福岡県立大学と協力して、地域全体で皆様をお迎えする準備を整えております。また、保育実践の場からは、福岡県私立幼稚園振興協会様、福岡県保育協会様、北九州市私立幼稚園連盟様、北九州市保育所連盟様より心強いご後援を賜りました。さらに、北九州市、(公財)北九州観光コンベンション協会様より「MICE 開催助成金」をいただき、学生・院生・保育者の参加費助成も実施しております。

多様な環境が息づき、子育てに深いゆかりを持つ北九州市で開催される今大会が、保育にまつわる「環境」をめぐる新たな視点を共有し、研究と実践の交流をいっそう深めていく契機となれば幸いです。皆様とともに多彩な議論が展開されることを願いつつ、北九州の地にお迎えできることを心より楽しみにしております。

日本乳幼児教育学会 大会の歩み

大会（開催年）	開 催 校	実行・運営委員長	研究発表件数
第 1 回（1991年）	聖和大学	莊司 雅子	20件
第 2 回（1992年）	広島大学	丸尾 譲	15件
第 3 回（1993年）	神戸大学	浜本 純逸	25件
第 4 回（1994年）	京都大学	稲葉 宏雄	28件
第 5 回（1995年）	鳴門教育大学	佐々木宏子	32件
第 6 回（1996年）	大阪教育大学	玉置 哲淳	33件
第 7 回（1997年）	西南女学院大学	米谷 光弘	36件
第 8 回（1998年）	名古屋女子大学	鈴木 重夫	33件
第 9 回（1999年）	お茶の水女子大学	無藤 隆	25件
第10回（2000年）	聖和大学	武田 敏昭	34件
第11回（2001年）	倉敷市立短期大学	前橋 明	49件
第12回（2002年）	昭和女子大学	福場 博保	45件
第13回（2003年）	大阪樟蔭女子大学	片山 忠次	60件
第14回（2004年）	中京女子大学	平岩 定法	56件
第15回（2005年）	京都文教短期大学	安藤 和彦	41件
第16回（2006年）	大阪総合保育大学	大方 美香	53件
第17回（2007年）	東京学芸大学 白梅学園大学	岩立 京子	74件

大会（開催年）	開 催 校	実行・運営委員長	研究発表件数
第18回（2008年）	大阪キリスト教短期大学	文屋 知明	62件
第19回（2009年）	川村学園女子大学	川村 正澄	56件
第20回（2010年）	関西学院大学 聖和短期大学	島田ミチコ	76件
第21回（2011年）	東京成徳大学 東京成徳短期大学	木内 秀俊	78件
第22回（2012年）	武庫川女子大学 武庫川女子短期大学部	西本 望	83件
第23回（2013年）	千葉大学	中澤 潤	124件
第24回（2014年）	広島大学	七木田 敦	126件
第25回（2015年）	昭和女子大学	横山 文樹	118件
第26回（2016年）	神戸女子大学 神戸女子短期大学	三宅 茂夫	138件
第27回（2017年）	西南学院大学	門田 理世	122件
第28回（2018年）	岡山大学	高橋 敏之	168件
第29回（2019年）	東北文教大学短期大学部	奥山 優佳	112件
第30回（2020年）	愛知教育大学 名古屋柳城女子大学	鈴木 裕子	139件
第31回（2021年）	福山市立大学	大庭 三枝	130件
第32回（2022年）	オンライン開催 (協力校：常磐会短期大学)	神長美津子	81件
第33回（2023年）	名古屋市立大学	上田 敏丈	119件
第34回（2024年）	いわて県民情報交流センター アイーナ	香曾我部 琢	80件
第35回（2025年）	西南女学院大学	上村 眞生	103件

大会プログラム

対面開催

第1日 12月13日 (土)

- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| 9:00~10:30 | 自主シンポジウムⅠ・口頭発表Ⅰ-1/2/3・ポスター発表Ⅰ |
| 10:40~12:10 | 自主シンポジウムⅡ-1/2・口頭発表Ⅱ-1/2/3・ポスター発表Ⅱ |
| 12:15~13:30 | 開会式・総会・表彰式 |
| 13:40~14:40 | 教育ミーティング |
| 14:50~16:20 | 大会企画シンポジウムⅠ・自主シンポジウムⅢ-1/2・ポスター発表Ⅲ |
| 16:30~18:00 | 大会企画シンポジウムⅡ・自主シンポジウムⅣ-1/2・口頭発表Ⅲ-1/2 |

*理事会は10:40~12:10にて開催いたします。

*展示販売等は6205にて行われます。

第2日 12月14日 (日)

- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| 8:40~ 9:00 | チャペルアワー・カフェタイム |
| 9:10~10:40 | 大会企画シンポジウムⅢ・口頭発表Ⅳ-1/2/3 |
| 10:50~12:20 | 学会企画シンポジウム・大会企画シンポジウムⅣ |
| 12:30~13:30 | 基調講演（交流会13:30~14:00） |
| 13:30~15:00 | 大会企画シンポジウムⅤ・自主シンポジウムⅤ-1/2・ポスター発表Ⅳ |
| 15:10~16:40 | 大会企画シンポジウムⅥ・口頭発表Ⅴ-1/2/3・閉会式 |

*展示販売等は6205にて行われます（2日目は16:30まで）。

大会日程

第1日 12月13日 (土)

(受付 8:15~)

	9:00~10:30	10:40~12:10	12:15~13:30	13:40~14:40	14:50~16:20	16:30~18:00
6201	自主シンポジウム I	自主シンポジウム II-1			自主シンポジウム III-1	自主シンポジウム IV-1
6202	研究発表 (口頭発表 I-1)	研究発表 (口頭発表 II-1)				研究発表 (口頭発表 III-1)
6203	研究発表 (口頭発表 I-2)	研究発表 (口頭発表 II-2)				研究発表 (口頭発表 III-2)
6204	研究発表 (口頭発表 I-3)	研究発表 (口頭発表 II-3)				
6206			開会式・総会・ 表彰式	教育ミーティング	大会企画 シンポジウム I	大会企画 シンポジウム II
6209		自主シンポジウム II-2			自主シンポジウム III-2	自主シンポジウム IV-2
6210	研究発表 (ポスター I)	研究発表 (ポスター II)			研究発表 (ポスター III)	

* 展示販売等は6205にて行われます。

第2日 12月14日 (日)

(受付 8:15~)

	9:10~10:40	10:50~12:20	12:30~13:30	13:30~15:00	15:10~16:40
751			基調講演		
6201		学会企画 シンポジウム		自主シンポジウム V-1	
6202	研究発表 (口頭発表 V-1)				研究発表 (口頭発表 V-1)
6203	研究発表 (口頭発表 IV-2)				研究発表 (口頭発表 V-2)
6204	研究発表 (口頭発表 IV-3)				研究発表 (口頭発表 V-3)
6206	大会企画 シンポジウム III	大会企画 シンポジウム IV		大会企画 シンポジウム V	大会企画 シンポジウム VI・ 閉会式
6209				自主シンポジウム V-2	
6210				研究発表 (ポスター IV)	

* 展示販売等は6205にて行われます。

会場・教室一覧

6号館・2階（メイン会場）

6206	
13日	
1215-1330	開会式・総会・表彰式
1340-1440	教育ミーティング
1450-1620	大会企画シンポジウムⅠ
1630-1800	大会企画シンポジウムⅡ
14日	
0910-1040	大会企画シンポジウムⅢ
1050-1220	大会企画シンポジウムⅣ
1330-1500	大会企画シンポジウムⅤ
1510-1640	大会企画シンポジウムⅥ・閉会式

6207	
13日・14日	大会本部

6209	
13日	
1040-1210	自主シンポジウムⅡ-2
1450-1620	自主シンポジウムⅢ-2
1630-1800	自主シンポジウムⅣ-2
14日	
1330-1500	自主シンポジウムⅤ-2

6210	
13日	
0900-1030	ポスターⅠ
1040-1210	ポスターⅡ
1450-1620	ポスターⅢ
14日	
1330-1500	ポスターⅣ

6205	
13日・14日	展示販売等

6202	
13日	
0900-1030	口頭発表Ⅰ-1
1040-1210	口頭発表Ⅱ-1
1630-1800	口頭発表Ⅲ-1
14日	
0910-1040	口頭発表Ⅳ-1
1510-1640	口頭発表Ⅴ-1

6204	
13日	
0900-1030	口頭発表Ⅰ-3
1040-1210	口頭発表Ⅱ-3
14日	
0910-1040	口頭発表Ⅳ-3
1510-1640	口頭発表Ⅴ-3

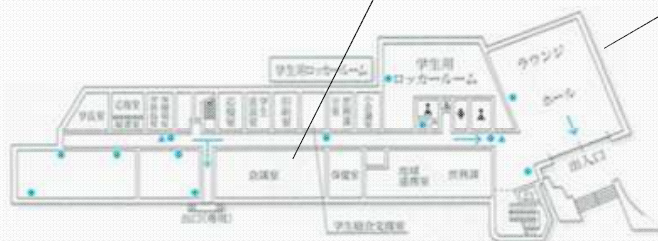
6203	
13日	
0900-1030	口頭発表Ⅰ-2
1040-1210	口頭発表Ⅱ-2
1630-1800	口頭発表Ⅲ-2
14日	
0910-1040	口頭発表Ⅳ-2
1510-1640	口頭発表Ⅴ-2

6201	
13日	
0900-1030	自主シンポジウムⅠ
1040-1210	自主シンポジウムⅡ-1
1450-1620	自主シンポジウムⅢ-1
1630-1800	自主シンポジウムⅣ-1
14日	
1050-1220	学会企画シンポジウム
1330-1500	自主シンポジウムⅤ-1

6号館・1階

会議室	
13日	
1040-1210	理事会

ラウンジ・ホール	
13日・14日	受付

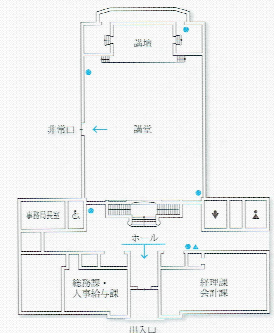


7号館・5階



751	
14日	
1230-1330	基調講演
1330-1400	交流会

マロリー館



マロリーホール	
14日	
0840-0900	チャペルアワー

※マロリー館1階と同じフロアです

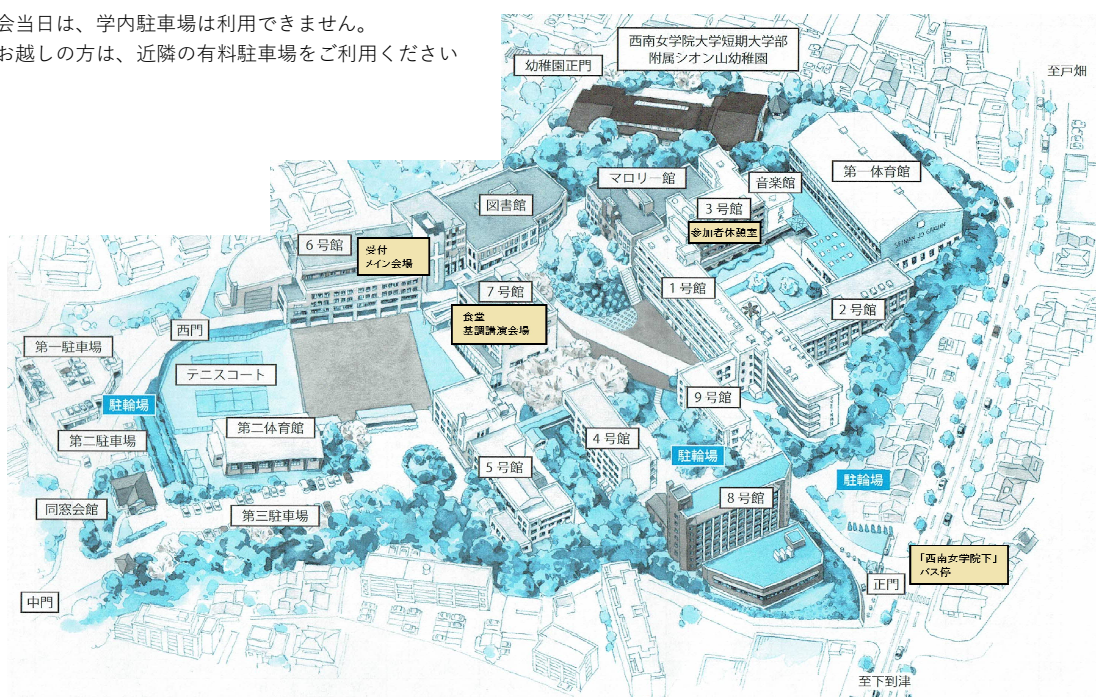
3号館・3階



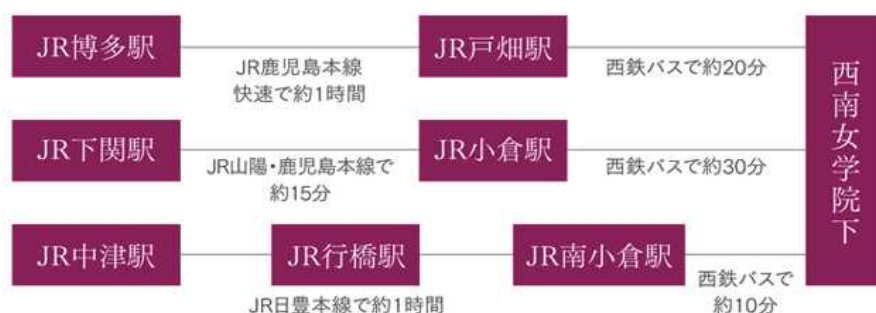
331	
13日・14日	
	会員休憩室

西南女学院大学 交通アクセス・構内マップ

※大会当日は、学内駐車場は利用できません。
車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください



交通アクセス



JR・バス利用

JR小倉駅南口下車

- ▶ 西鉄バス「小倉駅バスセンター2番のりば」から25・27・28番系統乗車（清水経由約30分）

JR小倉駅南口下車

- ▶ 西鉄バス「南小倉駅前」から25・27・28番系統乗車（清水経由約10分）

JR戸畑駅南口下車

- ▶ 西鉄バス「戸畑駅」から11・25・27・28・32・63・83番系統（一枝経由約20分）

いずれも「西南女学院下」下車

タクシー利用

JR小倉駅から約20分（1,500円程度）

JR戸畑駅から約15分（1,400円程度）

JR南小倉駅から約7分（900円程度）

大会参加者の皆様へ

SDGs 推進都市、北九州市へようこそ！

第35回大会の実施においては、これまでの大会同様に環境にやさしい持続可能な学会であることを意識し、取り組んでおります。具体的には、以下の点を実行しております。

○大会プログラムや要旨集などを PDF のみとして、紙媒体の使用を減らす。

○大会配布のネームホルダーは各自ご準備いただき、会場でのプラ資源の使用を減らす。

○ゴミのお持ち帰りをお願いする。

以上、ご理解いただきますようお願いいたします。

1. 受付

- ・6号館1階ロビーにて行います。会場内では名札を必ず着用してください。

受付時間：12月13日（土）8:15 ～ 17:00

12月14日（日）8:15 ～ 15:30

※当日参加者の方は、会員・非会員共に8,000円、学生（学部・大学院生）は2,500円を当日受付にてお納めください。

☆名札について

- ・当日、受付横の台で名前の用紙にご所属・ご芳名をご記入ください。
- ・本学会ではSDGsの観点から、参加者の皆様には各自ネームホルダーをご持参くださいますようお願いいたします。ネームホルダーをお忘れの方は、受付にてお申し出ください。

☆大会発表論文集

- ・大会ホームページに、大会研究発表・大会プログラムをPDFで掲載いたします。
- ・会場では冊子としては配布いたしませんので、当日ご持参のデバイスに取り込んでいただきますようお願いいたします。

2. クローク

- ・6号館1階ロビー横図書館エントランスにクロークを開設いたしますのでご利用ください。
- ・貴重品はご自身で保管してください。
- ・クロークの開設時間：12月13日（土）8:15 ～ 18:10

12月14日（日）8:15 ～ 17:00

3. 出店・販売等

- ・6号館2階 6205教室にて、書籍等の展示販売をしております。

4. 昼食

- ・両日とも西南女学院大学の学生食堂（ビュッフェ形式）がご利用いただけます。

営業時間11:30～13:30（13日のみ14時まで）

- ・会場校の周辺にはコンビニ・スーパー、飲食店がございますが、最寄りのコンビニ（ローソン中井4丁目店）やスーパー（ハローディ井堀店・スピナ中井店）まで、徒歩5分ほどかかります。
- ・昼食場所として、食堂、3号館331教室（会員休憩室）、ロビー、中庭テラス等がご利用いただけます。
- ・会場内にゴミ箱を設置しておりません。予約販売の弁当箱を除くゴミは、各自お持ち帰りください。

5. コピー機の利用について

- ・西南女学院大学生協売店のコピー機をご利用ください。料金は1枚10円（カラー50円）です。USB メモリから読み込む PDF ファイルであれば、データ出力も可能です。

6. 大会本部

- ・6号館2階6207教室となります。何かございましたらご連絡ください。

7. 駐車場・タクシー利用

- ・両日とも学内への自家用車の乗り入れはできません。公共交通機関をご利用いただくか、近隣の有料駐車場をご利用いただくようお願いいたします。
- ・タクシーにて正門から入っていただくと、会場がある棟まで乗り入れ可能です。西門や中門に到着された場合は、門の手前にて下車ください。

8. その他

- ・会場校（西南女学院大学）への直接のお問い合わせはご遠慮ください。対応いたしかねます。各種お問い合わせは、実行委員会事務局までお願いいたします。
- ・会場となる西南女学院大学のキャンパスは、正門から入るとすぐに急な坂道があります。キャリーケースの持ち運びなどは十分にご注意ください。
- ・各会場内での写真・ビデオ撮影、講演音声の録音は固くお断りいたします。携帯電話は電源を切るかマナーモードにし、呼び出し音やアラームなどはお控えください。
- ・14日の基調講演・交流会は、7号館5階751教室となります。参加者多数の場合は1つ下の階の741教室にて遠隔配信を行います。

発表者・登壇者の皆様へ

1. 口頭発表について

- ・個人または複数の人が口頭で研究を発表します。
- ・発表者は、10分前までに入室して、機材の動作確認をした上で、座長に出席していることを報告してください。連名発表の場合は筆頭発表者が報告をしてください。分科会の開始時間までに発表者がいない場合、発表は取り消しとなります。なお、動作確認は発表の10分前から可能です。
- ・発表は1発表につき20分です（15分発表、5分質疑応答）。開始から12分、15分、20分に合図の鐘を鳴らします。
- ・各分科会の最後に全体討議を行います。
- ・各分科会にコンピュータ等の設置はありません。ご自身のPCやタブレット等（HDMIケーブルのみ接続可能）をご持参ください。出力がUSB-CタイプのみのPCをご使用される場合は、ご自身のPCとプロジェクタを繋ぐUSB-C－HDMIの変換ケーブルをご持参ください。
- ・「口頭発表」と「全体討議」に参加することによって、公式発表と認められます。
- ・発表の際の配布資料は40部程度ご用意ください。分科会の会場学生スタッフへお渡しください。

2. ポスター発表について

- ・個人または複数の人が口頭で研究を発表します。
- ・発表者は、10分前までに入室して、ポスターの掲示を済ませてください。連名発表の場合は筆頭発表者が報告をしてください。分科会の開始時間までに発表者がいない場合、発表は取り消しとなります。
- ・今回のポスター発表は、「フラッシュトーク（1分間プレゼン）」形式で実施いたします。セッション開始と同時に座長の指示に従って、各発表者による自身のポスターの前での1分間のプレゼンテーションを実施してください。
- ・フラッシュトークの進行は、座長がマイクを回しながら行います。
- ・フラッシュトーク中は質疑応答を行いません。
- ・フラッシュトーク以降は、通常のポスターセッションとして自由討議・質疑応答の時間としてください。この時間中に座長が出席確認をいたします。
- ・本セッションでは発表者の前後入れ替えは行わず、全員が90分間ポスター前で待機・対応とします。
- ・発表の際の配布資料は40部程度ご用意ください。

3. 自主シンポジウムについて

- ・自主シンポジウムにつきましては、企画者と司会者がシンポジウムの流れを事前に打ち合わせをして、話題提供者と指定討論者はその指示に従ってください。コンピュータについては、口頭発表者と同様です。上記をご参照ください（各登壇者がご自身のPCやタブレット等をご持参、HDMIケーブルのみ接続可能、等）。

4. 発表者欠席の場合

- ・筆頭発表者が欠席した場合は、発表取消とみなします。ただし、大会本部に連絡の上、連名発表者が発表することは認められます。
- ・連名発表者は、原則として筆頭発表者と同じ分科会にご参加ください。特別な事情がある場合は大会本部にお申し出ください。

研究発表座長の皆様へ

【口頭発表・ポスター発表共通】

- ・座長は担当分科会開始10分前までに発表会場にお越しいただき、スタッフに出席の連絡をお願いいたします。
- ・分科会開始前に、座長間の打ち合わせをお願い致します。
- ・分科会終了時に、発表辞退者（不在者）等の確認用紙を各分科会の学生スタッフへご提出ください。

【口頭発表】

- ・発表者の発表時間帯を原則お守り下さい（発表15分・質疑5分）。
- ・発表時間内に質疑が終わらない場合、全体討議の時間に質疑の続きを済ませてから、討議にお入りください。
- ・発表に対してフロアからの質問がない際は、活発な討議が行われるよう進行をお願いいたします。
- ・発表辞退があった場合、辞退者の発表時間の20分は空き時間もしくは全体討議の時間に組み入れてください。その他の発表者の持ち時間は、プログラム記載に合わせた時間配分をお願いいたします。

【ポスター発表】

今回のポスター発表は、「フラッシュトーク（1分間プレゼン）」形式で実施いたします。

- ・セッション開始と同時に、まず協賛企業による1分間のフラッシュトークを実施してください。
- ・続いて、各発表者による自身のポスターの前での1分間のプレゼンテーションを実施してください。
- ・フラッシュトークの進行は、座長がマイクを回しながら進めてください。
- ・フラッシュトーク中は質疑応答を行いません。
- ・フラッシュトーク以降は、通常のポスターセッションとして自由討議・質疑応答の時間としてください。
- ・フラッシュトーク終了後、座長は筆頭発表者・連名発表者の出欠確認をお願いいたします。
- ・本セッションでは発表者の前後入れ替えは行わず、全員が90分間ポスター前で待機・対応とします。

Free Wi-Fi について

今大会では会場内において、Free Wi-Fi をご使用いただけます。

電波受信環境や接続状況によっては繋がりにくいこともありますので、予めご承知おきください。

SSID : SWGuest

PSK : seinan2025

* PSK は全て小文字になります。

北九州市の環境への取り組みと ネイチャーポジティブの視点から 幼児教育を共に考える



平井 良知

(北九州市環境局総務政策部 ネイチャーポジティブ推進課 課長)

【企画趣旨】

日本の環境問題は、戦後の高度経済成長期に顕在化しました。北九州市でも1960年代には大気汚染や海洋汚染が深刻化し、全国から注目される社会問題となりました。しかし、市民・企業・研究機関・行政が一体となった取り組みによって公害対策が進められ、1980年代には青空を取り戻し、洞海湾も豊富な漁場として復活しました。今では「環境先進都市」として世界からも高く評価されています。

経済発展と環境破壊の関係は、産業革命以降、世界各地で見られる課題であり、2015年に国連サミットで採択されたSDGsによって、その解決に向けた国際的な目標が示されました。しかし、その実現は容易ではなく、未来の世代に委ねられる部分も少なくありません。

幼児教育においても「環境教育」は重要なテーマとして位置づけられていますが、その複雑で多面的な課題を教育現場でどのように捉え、子どもたちにどう伝えていくのかは、まだ十分に議論されていない側面があると考えます。子ども世代に負の遺産として問題を先送りしないためにも、我々の世代が現状に向き合い、子どもたちの未来にどうつなげていくのかを考える必要があります。

そこで本企画では、「教育ミーティング」と題し、北九州市の公害克服から環境先進都市へと至る歩み、そしてネイチャーポジティブ（生物多様性の損失防止と回復）の視点からみた現状について、北九州市環境局ネイチャーポジティブ推進課長の平井良知氏にご紹介いただきます。そのうえで、幼児教育における環境教育のあり方を、参加者の皆さまと共に考える場としたいと思います。

【概要】

現在、世界的な環境問題として気候変動への対策が迫られていますが、これに続くものとして、「ネイチャーポジティブ」への取組が喫緊の課題となっています。ネイチャーポジティブとは日本では「自然再興」と訳されており、簡単に言えば、従来のように自然を守るだけでなく、積極的に再生する行動をとって自然を回復軌道に乗せるということです。

今、地球上ではものすごいスピードで生物多様性が失われています。過去にも地球では5度の大量絶滅が起こっていましたが、現在は第6の大量絶滅と呼ばれています。人間活動による影響が主な要因で、地球上の種の絶滅スピードは自然状態の約100～1,000倍にも達し、世界の生物多様性は過去50年で73%損失したという報告もあります。

このままでは、我々人類は持続可能な生活を維持できなくなる可能性があります。このような危機的状況

であるにもかかわらず、自分自身の問題として捉えている人はまだ少数派です。それは、未来を担う子ども世代に負の遺産として問題を先送りしているに過ぎません。

北九州市はかつて、公害によって汚染された海とスモッグに覆われた空を、市民と産学官が連携して公害克服に取り組み、青い空と海、そして豊かな生態系を回復させたという歴史があります。これこそがまさにネイチャーポジティブなのです。

これらを子どもたちの未来にどうつなげていくのか、一緒に考えていきたいと思っています。

【北九州市の環境への取組と評価】

- ・昭和38年に門司市、小倉市、若松市、八幡市、戸畑市の5市が合併して北九州市誕生
- ・昭和46年「北九州市公害防止条例」制定。市民と産学官が一体となって公害を克服
- ・公害克服のノウハウを開発途上国に提供した取組が評価され、平成2年に UNEP500賞、平成4年に国連自治体賞を受賞
- ・廃棄物ゼロ（ゼロエミッション）を目指した「北九州エコタウン事業」が、平成9年に全国第一号として国の承認を受ける
- ・平成16年に市民・NPO、事業者、行政などのあらゆる主体が協働して、市全体で環境保全を推進するため、環境首都グランド・デザイン」を策定
- ・平成20年に、温室効果ガスの大幅な削減など高い目標を掲げて取組にチャレンジする「環境モデル都市」に選定される
- ・平成23年、地球温暖化、資源・エネルギーといった環境問題など社会的課題に取り組む「環境未来都市」に選定される
- ・平成30年、社会・環境の3側面において新しい価値を創出し、持続可能な開発を実現する「SDGs 未来都市」に選定される

【略歴】

平成14年4月に北九州市役所入職。環境局廃棄物指導課、環境局環境産業政策室、環境局地域エネルギー推進課等を経て、令和7年4月に環境局ネイチャーポジティブ推進課長に就任

12月14日 (日) 8:40~9:00
【会場】マロリーホール

チャペルアワー

◆ 式次第

司会・奨励：金谷 めぐみ

(西南女学院大学保健福祉学部福祉学科准教授
キリスト教センター音楽主事)

奏 楽：山路 麻佳

(西南女学院大学短期大学部保育科講師)

前	奏	奏 楽 者
讃 美 歌	新生讃美歌 431 番「いつくしみ深き」1,4 節	一 同
聖 書	テサロニケ人への第一の手紙 5 章 16-18 節	司 会 者
奨 励	「祈りの場所」	金谷 めぐみ
後	奏	奏 楽 者

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。
(テサロニケ人への第一の手紙 5 章 16-18 節)

※チャペル後に美味しいコーヒーをご用意しています (先着 100 杯)。
どうぞ、お召し上がりください。



もったいないと絵本の話

真珠まりこ
(絵本作家)



『もったいないばあさん』を作ったきっかけは、「もったいないってどういうイミ？」という息子の一言でした。小さい子は、長い説明がわからなくても、心で思うようにイメージで理解することができると思い、絵本を作りました。

その後、新聞や雑誌などで連載を続けるうちに、私自身「もったいない」の意味について、深く考えるようになりました。「もったいない」は、命の大切さを伝える言葉であり、「敬う」ということ。だからこそ、もったいないばあさんは、今の時代に必要で、大切なメッセージを伝えるおばあさんだと思うのです。

最初の本から20年が経ち、『もったいないばあさんのおばあちゃん』という本ができました。シリーズの本を読みながら、それぞれの作品にこめられたメッセージについてお話しします。

おはなし会での、もったいないばあさんの絵描き歌、音頭の遊び方をご紹介したり、『おべんとうバス』など他の絵本も読みます。

【プロフィール】

絵本作家。神戸うまれ。大阪とニューヨークのデザイン学校で、絵本制作を学ぶ。

『もったいないばあさん』でけんぶち絵本の里大賞、ようちえん絵本大賞を受賞。

もったいないばあさんは毎日新聞、朝日小学生新聞などで連載され、2020年アニメとなって7カ国語で公開されている。

2008年より地球上で起きている問題と私たちの暮らしとのつながりを伝える、「もったいないばあさんのワールドレポート展」を開催。その他の作品に、『おべんとうバス』『おたからパン』（ひさかたチャイルド）、『なないろどうわ』（アリス館）、『おつきさまのパンケーキ』（ほるぷ出版）などがある。新刊は、シリーズ 20 周年の絵本『もったいないばあさんのおばあちゃん』（講談社）と『キノコのしろちゃん』（白泉社）。



当日は、以下の絵本を基調講演会場で販売します。

- ① もったいないばあさん（講談社、1,500円）
- ② もったいないばあさんのおばあちゃん（講談社、1,500円）
- ③ もったいないばあさんの知恵袋（講談社、1,500円）
- ④ もったいないばあさんのいただきます（講談社、1,500円）
- ⑤ もったいないばあさんと考えよう世界のこと（講談社、1,000円）
- ⑥ おべんとうバス（ひさかたチャイルド、900円）
- ⑦ おべんとうバスのかくれんぼ（ひさかたチャイルド、1,000円）
- ⑧ おせちのみんなあつまって！（ひさかたチャイルド、1,100円）
- ⑨ おつきさまのパンケーキ（ほるぷ出版、980円）
- ⑩ みかんのおひさま（ほるぷ出版、980円）
- ⑪ ぼんぼん（ひさかたチャイルド、950円）
- ⑫ おたからパン（ひさかたチャイルド、1,200円）

*①～③は真珠まりこ先生のサイン入り絵本です。当日購入された方には、お名前をその場で書いていただけます（希望される方のみ）。
*基調講演当日（14日）の販売（現金販売のみ）となります。
*先着順に販売いたします。数に限りがありますのでご注意ください。

病棟の環境づくりから考える「子どもの保育環境」

企画 日本乳幼児教育学会・保育臨床検討委員会

話題提供 石井 悠(東京大学教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 助教)

小野 鈴奈(総合母子保健センター 愛育病院 保育士)

植木 茜(神奈川県立こども医療センター 保育士)

指定討論 大軒 健彦(宮城県立こども病院 医師)

遠藤 利彦(東京大学教育学研究科 教授)

企画趣旨

保育所保育指針の中で、保育所保育の基本原則として「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」と記載されている通り、日本の保育・乳幼児教育の一つの特徴として、「環境を通した保育」があげられる。

このような保育環境の構成は、一般の保育所に限らず、子どもが入院し長時間を過ごす病棟においても、子どもの育ちを支えるうえで極めて重要な意味を持つ。日本においては、1954年に子どもの遊びを保障することを目的として、初めて小児病棟に保育者(当時は保母)が配置された。その後、2002年に保険点数が算定可能となって以降、病棟保育士の配置は全国に広がり、現在では多くの医療機関において保育士が活動している。病棟保育は公式なガイドラインが存在しないことから、実践上の課題も少なくない。しかし、病気や治療等による制約の多い病院という特殊な環境において、保育士が教育とケアの両側面から入院中の子どもの育ちを支える潜在的役割は非常に大きい(石井, 2023)。

本シンポジウムでは、病棟保育における環境構成に関する調査報告に加え、現場で実践を担う保育士からの話題提供を行う。これにより、病棟という特殊な環境における課題や工夫を明らかにするとともに、子どもが育つうえで必要とされる環境の本質に迫りたい。

病棟保育の環境構成に関する実態

石井 悠

病棟保育士がどのような環境で保育を行なってい

るのか、すなわち、入院中の子どもがどのような環境で育っているのか明らかにするため、写真投稿が可能なオンラインのアンケートフォームを利用して調査を行なった。本発表では、2024年12月~2025年1月にかけて、関東7都県の小児の入院病床を有する病院207施設を対象に行った本調査の結果について報告する。

本調査では上記病院に配置されている保育士に対して、環境構成で工夫している箇所・課題を感じている箇所について写真とその説明の投稿を依頼した。その結果、保育士がプレイルーム、廊下、処置室、病室など、病棟内の多様な空間において、子どもの視点に立ったさまざまな意図をもって環境構成を工夫している実態が明らかとなった。一方で、予算上の制約や病棟の構造的・制度的制限により、保育環境の構成に困難を感じている実情も浮かび上がった。本発表では、これらの知見をもとに、病棟という特殊な場における保育環境のあり方について検討し、今後どのような視点や支援が求められるのかについて議論を深めたい。

子どものこころと育ちを支える環境づくり

小野 鈴奈

病院は治療や検査をする場であるが、子どもが「生活する場」でもあるため、病棟内・病室内・ベッド上が「保育環境」となる。家庭や保育所等とは異なる環境下で、不安や寂しさを抱いたり、心理的負担を感じたりしながら過ごす子どもにとって、安心して安楽な環境を整えることを大切にしている。

さらに、点滴や医療機器などが身体に付いており行動に制限が伴い、治療上ベッド内での生活が中心の場合は、プレイルームで遊んだり、廊下を散歩したりすることはできない。このような環境で過ごす

子どもは、主体的な活動が制限されやすく、検査や処置など受け身になることが多い。そのため、あそびや生活面を通して、子どもの「やってみよう」「やりたい」という自発性を引き出す環境づくりが必要となる。

一人ひとりの子どもの病状や治療経過、安静度、制限、入院期間等を考慮した保育を展開し、個別性が高い病棟保育における環境づくりについて、事例を共有しながら検討したい。

クリーン病棟の保育環境

植木 茜

病院においてはスペースの制約、感染対策による制限等も多いが、環境についてこどもの年齢、発達、状況によって異なるニーズを持っている。個々に応じた環境づくりには難しさもあるが治療を受けながら日々成長するこどもたちにとって、こどもの視点に立った環境を整えること、調整することは重要な支援のひとつであり、工夫や検討が必要である。

乳幼児期のこどもには、信頼できる人との関わりの中で安心感を持って過ごすことができ、その時期に積み重ねるべき経験が希薄化しないような環境が求められる。また、学童期以上の年齢が高いこどもにも主体的に遊ぶことや学ぶこと、周囲とのつながりを感じながら生活すること、自分の時間を大切にできる環境が必要であると考えます。

生活をしながら同時に治療も行う場である病棟の中でどのようなことができるのか、また全てのこどもが安心して生活し、育ちの場としての環境づくりの工夫や課題について保育の視点から検討したい。

以上を踏まえて、大軒、遠藤両氏より指定討論いただき、議論を深めたい。

子どもに研究の話をしよう

企画	松井 剛太(香川大学 准教授) 七木田 敦(広島文化学園大学 教授) 上村 眞生(西南女学院大学 准教授)
司会	加藤 望(名古屋学芸大学 准教授)
話題提供	中川 順子(広島大学附属幼稚園 東広島園舎 主幹教諭) 本岡美保子(比治山大学 准教授) 井辺 和杜(広島文教大学 講師)
指定討論	横山真貴子(国立教育政策研究所 幼児教育研究センター 総括研究官)

企画趣旨

子どもにかかわる仕事を長くしていると、ふと立ち止まって考えることがあります。自分の研究の成果は子どもに返されるべき、それがないと何のための研究だろうか。たとえば、保育の場で、思いを告げられずに泣いている子どもや、急に塞ぎ込んで黙ってしまう子どもを見ると、本当に自分の研究は子どものためになっているのか、と忸怩たる思いに駆られることは少なくありません。一研究者として単にデータが欲しいだけなのかもしれない、あるいは誰も知らないことを誰よりも先に知ってほかの人に吹聴したいだけではないかと思ったりします。

保育者や幼稚園に訪問した際、子どもから「なんで来とん?」と言われることがあります。「君たちを研究するためだよ」とは言いません。満面の笑みで「遊びに来たんだよ」と応答すると、「ふ〜ん」と半信半疑の表情。「遊びに来ているなんてウソ!」。こちらの思惑は見透かされています。

研究者の思惑などよそに子どもは子どもとして存在していて疑いようがありません。子どもが「生きていること」に対して研究からわかることなどほんの些細なことにすぎないと感じることがあります。

そうだとすると、子どもに自分の研究のことを伝えたい。そして子どもに伝えられることがあるとし

たら、何をどのように話したらいいのでしょうか。

本シンポジウムでは、このような疑問に基づいて、研究の「対象者」としての子どもから、研究の「当事者」としての子どもに立ち位置を変えることの意味を皆さんと考えたいと思います。

研究の「当事者」である子ども達と、読み語りを通して研究の成果を共有する

中川 順子

幼稚園や保育園、こども園では、様々な子どもが共に過ごす中で、遊びや生活をつくっていきます。障害の有無や国籍にとらわれず子どもは友達と楽しむために、そして心地よく生活するために、見て、感じて、かかわって……あらゆる方法で相手を理解しようとしています。その過程での子どもの想像力や行動力にはいつも感心させられ『子どもってすごい!』と感じずにはられません。しかし「当事者」である子ども達はどのように感じているのでしょうか。すごいことではなく、当たり前のこととして捉えているのではないのでしょうか。本発表では、子どもの姿から学び得た私の研究の成果から『子どもってすごい!』を直接子ども達に伝えたいと思います。

子ども達の園生活はやりたいことで溢れ、そこで

は気づきや発見を誰かに知らせたい気持ちが生まれます。幼稚園では、思いを表現し共有する場の1つにサークルタイムがあります。表現する内容は遊びでの気づきや発見の伝え合い、製作物の紹介、時にはクラス運営にかかわることまで多岐に渡ります。共有されたことは大人の想像を超え、新たなアイデアや価値観となって子ども達の心に刻まれていきます。

本実践では、サークルタイムで私が担任する年長児クラスの子ども達に、私の体験と研究の成果を子どもに宛てて書いたメッセージ「いろんなひとを想像する力ー6さいのみんな・大きくなっていくみんなへー」の読み語りを通して共有します。その様子を動画撮影し、会場の皆様と視聴したいと思います。私の読み語りを、子ども達がどのように感じ解釈していくのかを、子ども達の仕草や表情や発言、子どもと私との対話、子ども同士の対話などから皆さんと考えていきたいと思っています。

子どもを研究の「当事者」にすることで研究者に突きつけられること

本岡美保子

これまで私は、保育者であった私と子どもとの相互作用を、それぞれの経験に切り分けることのできない一人称の経験と捉え、研究対象にしてきました。しかし、研究の「当事者」とは誰のことなのか、意識したことはありませんでした。

本シンポジウムのテーマをいただいた時にすぐに思い浮かんだのは、ある女兒（はなか／仮名／2歳児）のことです。なぜなら、彼女を研究の「当事者」として捉え直してみると、まるで彼女が、私が導き出したい答えを知っていて、そうはさせまいとしているように感じるからです。同時に、彼女は私に大事なことを、突きつけているようにも感じました。

当時私は、保育者として実践していた、子どもたちとのわらべうたのうたい合いを「エピソード記述」に書き、研究をしていました。その子どもたちの一人が、彼女です。もともと情動の波が激しかった彼

女は、私とわらべうたをうたい合うようになってから、徐々に落ち着いていきました。うたい合うことで穏やかになり、身を守るように固くしていた体の力も抜けるようになりました。そんな彼女でしたが、やがて、私への執着とともに、わらべうたを拒否するようになりました。わらべうたによる子どもとの相互作用を研究したい私には、彼女が「研究しないで」と言っているように感じました。もちろん彼女は、私が研究をしていたことは知りません。保護者への説明責任は果たしていたものの、2歳の子どもに対して研究の説明をすることはなかったからです。

話題提供では、研究の「当事者」である彼女の「エピソード記述」として読み直すことで、研究の「当事者」としての彼女が、当時の私に突きつけていたことは何だったのか、そして、今、彼女が私に突きつけていることは何なのかを提示したいと思います。そこから、子どもを研究の「当事者」として捉え直すことが、研究者にどのような意味をもたらすのかを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

子どもとの対話から生まれる理論の形成過程

ーアンリ・ワロンの研究姿勢から

井辺 和杜

『子どものことを子どもに聞く』という本があります。3歳から10歳になるまでの間、著者が息子さんにインタビュー形式で様々な質問を投げかけた対話の様子を記録したものです。親子ということもあるでしょうが、けっして研究の調査者と対象者という関係からは出てこないユニークなやり取りとなっています。今回のシンポジウムのテーマをいただくにあたり、まず思い浮かんだのがこの本でした。

私は、フランスの心理学者・精神医学者であるアンリ・ワロン (Henri Wallon 1879-1962) の発達論についての研究を進めています。彼の研究後期に位置づく著作には『子どもの思考の起源』というものがあり、それはまさにインタビューの対話記録から成っています。

例えば、「風って何かな」-「空気でできてる」-「じゃあ空気は」-「風でできてる」-「風はどこから吹いてくるのかな」-「空から」-「雨みたいに、空から降ってくるの」-「そうだよ」-「風は強いのかな」-「うん」-「どうして強い」-「木を倒すからね」・・・というように。

ワロンの発達論として研究を進めると、私はつついこの後に続く彼の解釈にだけ目を向け、抽象的な語句同士の関係を追いかけることに夢中になり、気が付くと子どもの具体的な姿を置いてけぼりにしてしまうことがあります。しかし上記の通り、ワロンには子どもとの生きたやり取りのなかで思索を深めてきたというプロセスがあったはずです。つまりは、具体的な子どもの姿から、彼の解釈に基づく(いささか抽象度の高い)語句が生み出されてきたという過程があったことを見逃すわけにはいきません。

今回、私はワロンの発達論を中心に子どもに関する理論の形成過程という話題提供を通して、子どもを研究の「当事者」として定位することが、子どもに向けてはもちろんのこと、どこまでの射程をもって意義を有することになるのかについてみなさんと考えていきたいと思います。

参考・引用文献

H. Wallon(1945)Les origines de la pensée chez l'enfant、1963 Paris: P.U.F. (アンリ・ワロン著、滝沢武久、岸田秀 訳 (1968)『子どもの思考の起源(上・中・下)』明治図書。

杉山亮 (2022)『子どものことを子どもにきく——「うちの子」へのインタビュー 8年間の記録』、ちくま文庫。

【MEMO】

気候変動下の保育環境の工夫 ～暑熱環境と向き合う日々～

企画・司会	伊勢 慎（福岡県立大学 准教授） 菅原 航平（福岡県立大学 講師）
話題提供	井手 裕子（東亜大学 准教授） 青木 哲（岐阜工業高等専門学校 教授） 伊藤恵里子（千葉明德短期大学 教授）
指定討論	北野 幸子（神戸大学大学院 教授）

企画趣旨

地球温暖化やヒートアイランド現象に伴い、夏季の暑熱環境が保育現場において深刻な課題となっている。2024年には東京都で熱中症警戒アラートが37回発表されるなど日本の平均気温が過去最も高い記録となり、2025年も続く猛暑により熱中症リスクが一層高まっている（2025年7月の月平均気温は、基準値からの偏差が+2.89℃となり、統計を開始した1898年以降で最も高い記録を3年続けて更新した（気象庁））。保育現場では猛暑により戸外遊びなどが大きく制限されたため「走る」など基本的な動作を室内で経験することが難しく子どもたちの体力や運動能力の低下、さらには認知面や情緒面への影響など心身の発達への影響が懸念されている。さらに、保育室内でも感染症対策としての換気と冷房効率の両立が課題となり、安全な環境の確保が困難な状況である。乳幼児は体温調節機能が未発達であるため特に注意が必要であり、保育者と子どもの暑さの感じ方にも差があることから、環境調整に苦慮している現実がある。

本シンポジウムでは、気候変動による暑熱環境が保育現場に与える影響を明らかにし、WBGT（暑さ指数）などの指標を用いた環境評価や保育者の工夫を共有する。また、室内外の環境調整の方向性に

についても議論し、保育の安全性を確保し、子どもたちの健やかな発達を保障するための対策を検討する。乳幼児教育の現場が直面する気候変動への対応策について、多角的な視点から考える場としたい。

猛暑による環境の変化と園長視点での保育への影響

井手 裕子

本研究では気候変動に伴う暑熱環境に対して保育現場がどのように対応しているかをインタビュー調査により実態を明らかにすることを目的とする。前回調査では、保育者間で懸念事項や対応の優先度に違いが見られ、それぞれ手探りで対応しているため園内で統一した対応が困難であることが示された。また、園長の判断が対応方針を決める上で非常に重要な役割を果たしているとの回答が得られたため、今回の調査では園長に対して重点的にインタビューを行い、課題意識や対策の優先順位について深掘り調査を実施した。これにより、保育者と園長の視点から課題認識や目的の違いを比較し、相互の意識ギャップや思いを明確化することで、日常保育における相互理解の促進や支援改善の方策について検討する。これらのインタビュー調査から、保育者、園長それぞれの立場からの目的や課題認識を比較する事で、現状をより具体化し、相互の意識のギャップ

や思いを明確化する事で、日々の保育活動における相互理解や支援の改善につなげる為の方策について検討する。

保育施設の温熱環境と熱中症リスク ―建築的側面と子どもの温冷感からの考察―

青木 哲

近年の高温化により、屋外のみならず室内での熱中症にも注意が必要となっている。園舎は園庭とのつながりや採光のために大きな窓を備えることが多く、それが強い日差しを取り込み、室温を上昇させる要因にもなっている。また、新型コロナが5類に移行した後も、感染症全般への対策として窓開け換気が求められており、高温の外気が流入して冷房の効きが悪くなる課題も生じている。これまでの実測調査では、保育室、遊戯室及び屋外の温熱環境に加えて、活動場所・時間による暑さ指数(WBGT)の変化を把握してきた。その結果、同じ園舎であっても部屋配置による温熱環境の相違がみられることを確認している。また、保育士と子どもの温冷感に差がみられることも把握しており、子どもの特性を理解した上での環境調整の必要性が示されている。これらデータを基に園舎内に潜む熱中症リスクを建築的側面から整理し、注意すべき点や工夫の方向性を示しながら、安全で適切な環境づくりについて考える。

猛暑下における子どもの運動機会確保と保育環境の工夫

伊藤恵里子

近年の温暖化により夏季の保育現場では戸外活動が制限され、子どもの体力や運動能力の低下が懸念されている。特に「走る」といった基礎的な動きの機会が乏しく、室内活動では限界があることが、保育者へのインタビュー調査から明らかとなった。幼児期の運動経験の不足は身体発達のみならず、認知能力や感情のコントロール、協調性や集中力などに

も影響を及ぼす可能性がある。また、子どもの季節感や集団形成過程にも変化が見られ、人員配置や環境整備等、多岐にわたる課題も浮上している。子どもが自然に体を動かせる経験を保障するため、保育者の工夫と社会的支援が求められているのではないだろうか。

当日は、X市の2施設における保育環境の工夫を紹介する。A園は園内6カ所にWBGT計測地点を設け、独自の基準で戸外活動を判断している。B園は園庭を持たず、これまでの公園利用から公民館等を活用した保育へと展開している。特色ある工夫の一方で課題も多く、行政による支援の必要性についても考えたい。

以上を踏まえて、北野氏より指定討論頂き、議論を深めたい。

1・2歳児の主体的で安全な保育環境を整える —子どもの遊び環境の可視化への挑戦—

企画・司会 田中 沙織(九州産業大学)
話題提供 江村 優(つぼみ保育園 主任保育士)
深野妃砂子(きのみの森こども園 園長)
石田 由香(水巻町第二保育所 所長)
平河九十美(別府つくし保育園 主任保育士)
指定討論 大方 美香(大阪総合保育大学 学長)

企画趣旨

子どもの体力や運動能力及び活動量の低下が取りざたされるなか、近年では保育事故を報道等で目にする機会も多く、保育の外部評価においても安全な環境に対する評価が重んじられている。とはいえ、安全ばかりに注視することで子どもの行動を制限していることはないだろうか？子どもへのかかわりに目を向ければ、「挑戦させたい」という思いがあっても、けがをさせたくないという気持ちから、困った行動、危険な行動と捉え、子どもの行動を制限する等、子どもの「遊びたい」「挑戦したい」という環境とはかけ離れた保育を余儀なくされるジレンマは保育者であれば誰も一度は経験したことがあるかもしれない。それは、それぞれの保育者の経験や直感などに基づく暗黙知として、個人の中で可視化されずに保育が行われていることにも起因するだろう。

そこで、本シンポジウムでは、「遊び環境の可視化」をキーワードとして、福岡県保育協会保育士会調査研究部会で行った3つの実証的研究を紹介していただく。その研究結果を共有し、「1・2歳児の主体的で安全な保育環境を整える」というテーマについて、大方美香先生に指定討論をいただき、時間の許す限りフロアの皆様と議論を深めたい。

1・2歳児の身体活動量と保育内容の関係から科学的根拠に基づく保育実践を探る

江村 優

0歳から2歳の子どもの運動と生活の区別が曖昧で、一人ひとりの子どもがどの程度の身体活動を経験しているかは明らかではない。また、子どもの身体活動を保育者の主観で評価することで、実際の子どもの身体活動量とは一致しないこともあるのではないかと考えられる。

そこで、目に見えない子どもの身体活動量の実態を科学的に数値として可視化し、子どもの身体活動に対する保育者の主観が一致しているのか、また、身体活動と保育内容がどのように関連しているのかについて、1・2歳児を対象に検討した。

その結果、1・2歳児においても子ども間や調査園間で身体活動の差異が確認された。本シンポジウムでは、その詳細について報告し、保育者による主観的な子ども理解ではなく、科学的根拠に基づく保育実践に向けて話題提供をしたい。

ループリック型環境評価票を用いた心地よく身体を動かすための環境整備

深野妃砂子

運動機能が初歩的な段階にある1・2歳児に対し

て、主体的な運動遊びの支援をするためには、一人ひとりの学びの速度や課題を把握し、対象児のニーズに合う環境をクラス内で共有することが望ましいと考える。保育者それぞれの保育観が異なる複数担任制のなかで、子どもの捉え方を一致させることは難しい。しかし明確な評価基準があれば、評価の観点や根拠の差異について検討する中で、主体的な運動遊びの支援をするために、環境整備について方向性を共有するきっかけになるのではないかと考える。そこで、書く仕事の負担を軽減しながらも評価を効果的に活用できるように、ICT化したループリック型保育環境評価票（田中，2023）を用いて保育現場での使用を試みた。その効果と課題について報告し、より良い保育環境整備と保育者の専門性の向上について議論したいと考える。

視線測定器（アイトラッカー）を用いて探る保育者の言動に隠された暗黙知

石田 由香

保育現場において、子どもの主体性を育みながら子どもの感情を理解し、いかに安全に心身の成長を促していくかは、保育者の重要な役割である。しかし、子どもの遊びが自由に展開していく過程において、環境の構成や保育者のかかわり、また安全への配慮や危険予知などは、それぞれの保育者の経験や直感などに基づく暗黙知として個人の中で可視化されずに行われている。保育者は、保育中にどこを見て何を感じ、どう子どもとかわかっているのだろうか。そこで、保育者の視線に着目し、保育者の保育観や日常の子どものかかわり方との関連性を検討したいと考えた。本研究では、1・2歳児の運動遊び場面において保育者の視線計測を用い、保育者の行為の根拠を基に、主体性を育てながらも安全な環境を作り出す保育者の専門性について検討することを目的とした。

子どもの遊び環境の可視化への挑戦

平河九十美

福岡県保育協会保育士会調査研究部会で行った3つの実証的研究では、身体活動量を数値化した分析、ループリック型保育環境評価票を用いた保育者間の子ども理解の共有や、さらに視線測定器による検証を通じて、これまで暗黙知として扱われてきた保育者の行為の意図や根拠の可視化を試みた。その結果、園や保育者の関わり方によって1・2歳児の身体活動量や強度が大きく異なることが明らかになり、環境構成や連携のあり方が子どもの主体的活動を左右することが示された。また、保育者は、子どもの姿や表情だけを目で追っているのではなく、自分の動きや立ち位置、役割を全うしながらも、保育者間で常に情報を交わしながら連携を行う様子も明らかとなった。保育観の醸成と根拠のある実践に向けた資質向上について話題を提供すると共に、子どもの遊び環境の可視化へ向けて議論を深めたく、これら3つの実証的研究の関連性について紹介する。

架け橋プログラムの充実に向けた環境整備への考察 ～架け橋プログラムの実践から見てきたもの～

司会・指定討論 脇田 哲郎（九州栄養福祉大学 教授）
話題提供 小島久須美（認定こども園東筑紫附属幼稚園 園長）
奥 理映子（北九州市立到津小学校 校長）
武田 祐子（九州栄養福祉大学 教授）

企画趣旨

架け橋期は、義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間にあたり、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期であり、全ての子供が格差なく質の高い学びへと接続できるようにすることが求められる。この時期の教育の充実を目指したのが架け橋プログラムである。しかしながら、取組みは必ずしも積極的に行われているとは言えない。制度上、構造上の課題なのか、それとも幼児教育施設や小学校教員の意識上、認識上の課題なのか、指導や実践上の課題なのか明らかにするとともに解決に取組まなければならない。そこで、これまで北九州市の架け橋プログラムの一環として、取組みを推進してきた、認定こども園東筑紫附属幼稚園の小島園長先生からは、幼稚園から見た環境整備について、関係小学校として取組んだ北九州市立到津小学校の奥校長先生には、小学校から見た環境整備について話題を提供してもらう。さらに、これまで現場で架け橋プログラムに取組んできた九州栄養福祉大学の武田教授には、取組みから得た手応えについて話題を提供してもらい、本シンポジウムの課題解決に迫りたい。

認定こども園から見た架け橋プログラムにおける環境整備について

小島久須美

本園では、昭和58年度以前から卒園児の成長を継続的に見守り、とりわけ北九州市立到津小学校とは運動会や授業参観を通じて、成長した卒園児の様子を確かめてきている。また、歴代の校長先生には卒園式での祝辞や講演会の講師としてご協力いただくなど、長年にわたり交流を積み重ねてきている。さらに、北九州市幼年期教育研究会でも、公立・私立幼稚園と小学校教員が率直に意見を交わし、実践的な知見を蓄積してきている。近年は「連携」から「接続」への発展が求められ、5歳児から小学校1年生を対象とする「架け橋プログラム」が重視されている。北九州市でも架け橋カリキュラムの策定が始まり、校区の実情に応じた取組も進められている。しかし、制度や人事異動の影響で継続性の確保は容易ではない。校長・園長が交代しても幼小接続が続くようにと、今年度はさらに計画的に取り組み、この実践を通じて、今後の接続期の教育環境の在り方を改めて問い直したいと考えている。

小学校から見た架け橋プログラムにおける環境整備について

奥 理映子

本校では、5歳児の学びや育ちを小学校教育へ円滑に引き継ぐことを目的に、東筑紫幼稚園の年長児と1年生が年間3回交流する「架け橋プログラム」を実施している。打合せについては、年度末に管理職と保幼小担当者、教務主任、担任で振り返りを行い、新年度になり、新メンバーで4月に顔合わせと一年間の日程調整と内容について確認している。また、夏季休業日中に1回目の交流の振り返りと2回目以降の交流内容について確認を行っている。交流では年長児と1年生の顔合わせ、公園での自然遊び、小学校への招待「おもちゃランドへようこそ(仮)」などを通じて、1年生は主体性や思いやりを育み、年長児は入学への期待感を高めている。1年生が教える立場を経験することで責任感が育まれ、学びの連続性が意識されるようになった。一方で、さまざまな課題がある。今後は、幼児期の学びを理解し、他園との合同交流や地域連携、教職員間の情報共有を図りながら、持続可能な交流として無理のない計画で継続していくことが求められる。

架け橋プログラムの取組から見てきた幼小の環境整備について

武田 祐子

幼小接続研究では、架け橋プログラムの実践を基盤に、幼児期の体験を小学校教育へと円滑に接続することが重視されている。架け橋プログラムの実践において、領域「環境」と小学校生活科との関連は特に注目される。幼児期の園庭遊びや散歩、地域交流は「自然との関わり」「社会生活との関わり」といった姿を育み、入学期の生活科活動に直結する。本研究報告での「まち探検」では、1年生での生活科の学びが幼児期の経験と結びつき、安心感や主体的探究心を促すと同時に、2年生の生活科における発展的な「まち探検」へと継続して活きていること

を明らかにした。特に、架け橋期に限定されず、幼児期から2年次までの学びが一連のカリキュラムとして連続している点が重要である。さらに、幼小の教員が地域資源を共有し計画化することにより、探究活動は系統的に深化することが明らかになった。一方で、幼小間の教育観の意識の差や、学びの成果をどのように評価・記録し共有化するかが課題であり、今後は接続カリキュラムの体系化のもと、ドキュメンテーションやポートフォリオ活用が求められる。

フィンランドの乳幼児教育を探る ー高福祉・多文化環境のなかでー

企画・司会	青山 優子 (九州女子大学 名誉教授・九州女子大学附属鞍手幼稚園 園長)
話題提供	村上 里絵 (光沢寺中井幼稚園 園長)
	高良 美香 (九州女子大学付属自由ヶ丘幼稚園 園長)
	松木 栄子 (九州女子大学附属折尾幼稚園 園長)
指定討論	匝瑳 岳美 (長野県立大学 准教授)

企画趣旨

こども家庭庁発足以来「こどもまんなか社会」の実現を目指した様々な取り組みの内、令和5年の「はじめの100か月の育ちビジョン」は、こどもの生涯にわたる幸福すなわち「ウェルビーイング」の考え方を中心に据えている。「ウェルビーイング」とは、身体的・精神的・社会的に幸せな状態にあることを指すものであり、包括的な幸福として、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など生涯にわたる持続的な幸福を含んでいる。

そこで20世紀いち早く高福祉国家を目指し、8年連続「国民の幸福度No.1」であり、施策の中心に「教育」を据え「教育の先進国」とも言われているフィンランドを、「子どもの育ち」に深く関わっている私達は今年2月仲間と共に訪れた。滞在中、4施設を見学し、園での取り組みや園長先生の幼児教育への思いを聞く機会もあった。そこでは、感じることを考えることまた新たな発見など多々あり、帰国後それぞれの立場でこの研修を生かし現場で取り組んでいるところである。

今回は「研修の報告」「その後の取り組み」等いろいろな視点から、「フィンランドの乳幼児教育」についてご参加の皆様とともに探ってみたいと思う。

フィンランドの乳幼児教育に学ぶ環境の重要性

村上 里絵

子どもを取り巻く環境を①国の施策②人的環境としてのおとな③「幼児の自立を促す環境」の視点から考察する。①国の施策として、保育者一人当たりが担当する園児数は日本より少なく、子どもたち一人ひとりの思いを受け止め活動するには、非常に良い環境である。移民が多く多文化の子どもたちにとっては、言語をはじめ丁寧な関りが保証されるであろう。②移民の子どもたちには、フィンランド語を指導する教師が各幼児教育施設を廻り、生活できるレベルの言語習得を目指して指導している。また、幼児教育施設から小学校への進学にも配慮しており、幼児と小学生の交流頻度は日本より高い。前期(秋から翌春まで)には、1週間に2日間、小学校教諭が園に出向き子どもたちの様子を把握する。後期(春から翌秋まで)には、1週間に3日程度、園から就学前の幼児たちが小学校で児童と交流する。よって幼児教育施設側と小学校の相互理解はかなり進んでいる。日本の「年に1回程度、幼稚園・保育園・認定こども園の子どもたちと小学生とが交流する」が40%前後であるのとは大きく異なる。③施設環境については、全ての子どもが自立して生活できる環境が多々みられた。例えば、排泄で失敗すれば自

分でシャワーを浴びて自身で着替えられるような椅子のトイレ設置や、遊び場から寝室に様変わりする二段ベッド収納の家具等々大変驚かされた。何よりも子ども一人一人が自ら考えて行動できるような保育室になっており、子どもの自立を促す環境構成に、学び、今後の環境構成の工夫に繋げたい。

フィンランド乳幼児教育に観るICT環境

高良 美香

フィンランドの幼稚園では、子ども達の学びや遊びを支える環境の一部としてICT機器が積極的に取り入れられている。各保育室にはスマートボードやタブレットが標準装備されており、教育・保育の内容を拡張するための工夫が随所に見られた。このようなICT環境は言語習得を支援するツールとしても有効に機能しており多言語環境にある子ども達が楽しみながら語彙を増やせるよう神経衰弱のようなゲーム形式のアプリも活用されていた。また、家庭でも継続して使用できるようアプリケーションが整備されており、保育と家庭との接続環境も構築されている。

一方で、子ども達が個別にタブレットを使用する時間は1回15分とされており過度な利用を避けながらも、発達段階に応じた効果的な活用がされている点が印象的であった。保育者はICTを主役ではなく「補助ツール」として捉え、子どもの主体的な活動を支えるための環境構成の一部として取り入れている。さらに、園の玄関には大型のスマートボードが設置され、保護者へのお知らせや行事の案内などが共有される仕組みが整えられていた。これにより、保護者と園との情報共有が円滑に行える環境が実現されている。このように、フィンランドの幼稚園では、ICT機器が物理的な設備として整っているだけでなく、「子ども」「保育者」「保護者」それぞれにとって有効に機能するよう環境全体の設計にICTが組み込まれていたことが特徴的であった。

自然を保育環境とするフィンランド森のようちえんからの学び

松木 栄子

森のようちえんケサクンプ園では、「森の中に幼児教育の全てがある」の信念の下、自然と触れ合いながら観察・体験の遊びを通して、子ども達は生きるための様々な能力やスキルを育てていた。雨だろうが、雪だろうが、マイナス10℃の気温であろうが、週3回の森の中の自然体験における育みが重要視されている。その中で、保育者が最も大切にしていることはやはり「安全面」への配慮である。積雪の山中を子ども達は走り転がり跳び下りる等活動に夢中となり、ヒヤッとする場面もある。しかし、ここでは必要以上の保育者の静止語や過干渉な態度は一切見られなかった。一人一人の子どもが様々な体験を通して自分で危険に対する解決策を見つけ試すその姿をじっと見守っている。この空間・環境を作り出すには、個々の子ども理解・積み重ね・継続・諸々の知見・見通し力等々目まぐるしく頭を錯綜したが、大人が余裕をもって接する環境の重要性に新たに気づかされた。

このような安心感の中で、子どもたちは様々なことに挑戦し、全身をフルに使いながらバランスよく鍛えており、身体能力の高さを感じた。そして何よりも、子ども主体で遊びが広がり、アクティブな活動をする姿がまばゆいほど輝く中に、背景にある森の自然の変化を感じながら生活し、温かく見守られ・育てられているという「ウェルビーイング」に感動を覚えた。

以上を踏まえて、匝瑳先生に指定討論頂き、議論を深めたい。

保育にまつわる「環境」の問い直し

企画・司会	上村 眞生（西南女学院大学 准教授・かっぱっばこども園 教頭）
話題提供	高原 恵子（北九州私立幼稚園連盟 会長・認定こども園徳力団地幼稚園 園長） 安川 渉寛（自閉症（ASD）支援特化型事業所 sTack 管理者） 北野 久美（北九州市保育士会 会長・認定こども園あけぼの愛育保育園 園長） 七木田 敦（広島文化学園大学大学院 教授・教育学研究科長）
指定討論	神長美津子（大阪総合保育大学大学院 教授）

企画趣旨

わが国の乳幼児期の教育・保育において、「環境」は重要なファクターであるというのは、共通の認識であるだろう。しかし、保育における「環境」は多岐にわたっており、時に都合良く解釈されてはいないだろうか？子どもが主体的に活動を展開するために、保育者には環境を構成することが求められているが、物的環境の構成だけが全てではないし、人的環境としての役割や影響を考慮しつつ保育者主導とならないように注意を払う必要があるし、受動的になりがちな社会的環境をねらいに沿って保育に盛り込むためには周到な予測と準備が必要である。領域環境における子どもの発達にも目を向け、環境教育についても地球規模の視点で取り組む必要がある。これほど多種多様な「環境」が混在する保育実践において、「環境を通して保育を展開する」とは、どう考えるべきであろうか。誘導保育にも源流を見ることができる「環境を通して」という我が国の保育の展開を基軸に、「環境先進都市」である北九州の地で、保育にまつわる「環境」について共に問い直すシンポジウムとしたい。

主体的に環境に関わり、遊びをつくり出す子どもの姿を願って

高原 恵子

幼児の主体性の表出を促す環境の在り方を日々の保育場面から省察すると、幼児の活動は、保育者との肯定的な関係性に基づく指導援助の中で活発化し、更に他児たちの発話や行動に触発されて広がりをを見せていくことが多い。乳幼児教育での遊びや学びは、幼児主体で偶発的に生じているように見えることが多いが、遊びの展開や学びの深化には、「幼児の姿を予想した環境構成」「遊び方の変化に合わせた物的環境の構成」「遊びの発展を促す人的環境」といった保育者の対話的な役割が大切であると考えているので、いくつかの実践の中で考察してみる。

また、2017（平成29）年に告示された現行の幼稚園教育要領の改訂も進んでいる中で、「環境を通して展開することが基軸である」とされる「環境」と、「領域環境」の中の「環境」という文言について、この文言の違いを保育現場はどのように受け取り、理解しているかを参考にして「保育にまつわる環境の問い直し」について考えてみたい。

子どもを中心におく環境と発達の連続性

安川 渉寛

いわゆる架け橋期とも言われる接続期（発達支援の中でいう移行期）の中でも接続中期以降に子どもと関わる立場から、子どもが主体的に活動を展開できる環境とは何か…を中心に話したい。

また子どもと単に表しても、現場におけるその子どもは一括りにできるものではなく多様なニーズをもっているが、それと同時に人的環境である私たちの関わり方（ストラテジー同様）も様々であり、社会背景等も相まってその関係は複雑化しているとも思われる。その中で統合保育そのものの必要性は十分にあるものの、一人ひとりに対する発達支援と実際の場面における課題等も話題に加えたい。

最後に発達障害（未診断でも発達の偏りが顕著な子どもを含む）のある子どもが、接続期以降の社会参加・学校（社会）生活に一定の困り感を抱えている現状から、幼児期における目指すべき発達支援とは何かを提起し、今学会の主題でもあるように問い直しの機会としたい。

子どもにとっての環境って何だろう～ヒト、モノ、コトそして現象

北野 久美

私たちが就学前保育を展開する中で、そのよすがとなる保育所保育指針や幼稚園教育要領、認定こども園教育保育要領の中で3歳以上児に関する内容等は整合性が図られています。

その中で領域「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探求心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」とあります。さて、ここでの身近な環境とは何を指し示すのでしょうか。自然も人も物も現象もすべてが環境であり数量形も環境、地域の生活、季節の行事もすべて環境となると、その「環境」との相互作用で育つ子どもの心身の重要性は理解できるものの、複雑さ、それゆ

えに実践の中での捉えにくさが見えてきます。だからこそ好奇心や探求心が芽生えるのではありませんが、ここではその整理や現場でのとらえ方等について考えるきっかけとなれればと考えています。

環境は第三の教師

七木田 敦

イタリア、レージオエミリアの基盤を築いたマラグッチ（1920-1994）は、その図書の中で、「環境は第三の教師である」と看破した。確かに書物などで見える実践記録には、保育室の配置、光の取り入れ方、素材の選び方、子どもの作品の展示など、その実践で環境を教師とする考え方には深く共感させられる。翻ってわが国の保育実践の巡回指導の場面でも、最近環境構成やコーナーの設置の仕方などの感想、指摘を求められることが少なくない。保育者の指導さえも「人的環境」という認識が浸透しているが、過度な環境への傾斜は、本来あるべき「保育者－子ども」関係について深く考える機会を保育者自らが回避しているような気がしてならない。マラグッチの弁を借りるなら、「第一の教師は、子ども自身」、「第二の教師は大人、教師」なのであり、環境が保育者の指導やかかわりに優先してあるわけではない。

以上を踏まえて、神長氏より指定討論頂き、議論を深めたい。

自主シンポジウムⅠ

12月13日（土） 9：00～10：30

【会場】6201

テーマ

若手保育者の早期離職の理由と対策

—養成校と園でできる手立て—

企 画	東城	大輔（大阪総合保育大学）
	中橋	美穂（大阪教育大学）
司 会 話題提供	東城	大輔（大阪総合保育大学）
	邨橋	智樹（幼保連携型認定こども園たちばな幼稚園）
	藤田	清澄（盛岡大学）
	中橋	美穂（大阪教育大学）
	岡部	祐輝（幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園）

自主シンポジウムⅡ-1

12月13日（土） 10：40～12：10

【会場】6201

テーマ

保育における行事の在り方の再考

企 画	田島	大輔（和洋女子大学）
	名倉	一美（佐賀大学）
話題提供	高田	美波（佐賀女子短期大学附属ふたばこども園）
	村岡	直子（佐賀女子短期大学附属ふたばこども園）
	芦田	菜美（大分ふたばこども園）
	吉田	茂（大分ふたばこども園）
	松本	信吾（岐阜聖徳学園大学）
指定討論		

自主シンポジウムⅡ-2

12月13日（土） 10：40～12：10

【会場】6209

テーマ

乳幼児の性犯罪被害と防止のための性教育の取り組み

企 画	大橋 渉（愛知医科大学）
話題提供	北原 由美（社会福祉法人どろんこ会）
	青木 利津（社会福祉法人どろんこ会）
指定討論	山内 千春（株式会社ドッグエンタープライズ盗撮防犯 Wc）

自主シンポジウムⅢ-1

12月13日（土） 14：50～16：20

【会場】6201

テーマ

保育者養成校における実習生の指導と励ましと
実習に行かない学生のモチベーション向上について

企 画	田中 卓也（育英大学）
司 会	田中 卓也（育英大学）
話題提供	小島千恵子（社会福祉法人ねむの木 保育アドバイザー・あいち保育研修研究協議会 運営協力員）
	市野 繁子（駒沢女子短期大学）
	岡部 祐子（徳島文理大学短期大学部）
	安氏 洋子（長野県立大学）
	戸田 大樹（創価大学）
	舘 秀典（駿河台大学）
	山本 麻美（名古屋葵大学短期大学部）
	山梨 有子（彰栄保育福祉専門学校）
指定討論	田中 浩之（神村学園専修学校）

自主シンポジウムⅢ-2

12月13日（土） 14：50～16：20

【会場】6209

テーマ

インクルーシブ保育を考える（４）

～共同生活を通して育ち合う関係とは～

企 画	若月 芳浩（玉川大学・四季の森幼稚園）
司 会	若月 芳浩（玉川大学・四季の森幼稚園）
話題提供	守 巧（こども教育宝仙大学） 長谷川幸男（南台幼稚園）
指定討論	広瀬 由紀（共立女子大学）

自主シンポジウムⅣ-1

12月13日（土） 16：30～18：00

【会場】6201

テーマ

子どもの当事者視点から研究を描くことはできるのか？

企 画	松井 剛太（香川大学） 七木田 敦（広島文化学園大学）
司 会	松井 剛太（香川大学） 七木田 敦（広島文化学園大学）
話題提供	大野 歩（山梨大学） 真鍋 健（千葉大学） 津川 典子（広島県乳幼児教育支援センター）
指定討論	久保 健太（大妻女子大学）

自主シンポジウムⅣ-2

12月13日（土） 16：30～18：00

【会場】6209

テーマ

なぜ今 Anji Play（安吉遊戯）なのか？

—中国の「革新的」幼児教育実践に学ぶ—

企 画	中坪 史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）
司 会	上山瑠津子（静岡大学教育学部）
話題提供	中坪 史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）
	上山瑠津子（静岡大学教育学部）
	劉 郷英（福山市立大学教育学部）

自主シンポジウムⅤ-1

12月14日（日） 13：30～15：00

【会場】6201

テーマ

保育者の多様性に関わる現状・課題・希望

企 画	卜田真一郎（大阪常磐会大学短期大学部）
司 会	卜田真一郎（大阪常磐会大学短期大学部）
話題提供	長澤 貴（福山市立大学）
	佐々木由美子（足利短期大学）
	迫 共（比治山大学）
指定討論	林 恵（作新学院大学）

自主シンポジウムV-2

12月14日（日） 13：30～15：00

【会場】6209

テーマ

保育の場での『公平』について考える：子どもたちにとっての公平とは？

企 画	熊木 悠人（福岡教育大学）
司 会	橋本 祐子（関西学院大学）
話題提供	吉迫 務（福津市立神興幼稚園）
	松尾 奈々（福岡教育大学附属幼稚園）
	石川 美喜（宗像市子どもの自立サポートセンター ホープ）
	戸田 有一（大阪教育大学）
指定討論	藤田 文（大分県立芸術文化短期大学）

研究発表（口頭発表 I -1）

12月13日（土） 9：00～10：30

【会場】6202

座長 河合 光利（帝京短期大学 / 玉幼稚園）
余公 裕次（活水女子大学）

- 1 幼児教育における SDGs の「全人教育」的解釈（5）
—4歳児の保育実戦から—

河合 光利（帝京短期大学 / 玉幼稚園）
永井理恵子（帝京短期大学）

- 2 子どもの心の寄る辺となる「すべり台」
—戦後の保育園乳児室での自由遊びの記録から—

小林 祥子（横浜高等教育専門学校）

- 3 幼稚園教育要領等における「環境」の二面性について

余公 裕次（活水女子大学）

- 4 堀合文子の保育における身体性について
—「リズム研修会」の研修内容を手がかりに—

李 睿苗（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

研究発表（口頭発表 I -2）

12月13日（土） 9：00～10：30

【会場】6203

座長 前田 和代（東京家政大学）
久米裕紀子（武庫川女子大学）

- 1 企業主導型保育事業における助成金不正受給スキームの実態と構造的背景
—元職員インタビューに基づく事例分析—

古谷 淳（高田短期大学）

- 2 認可外保育施設における巡回指導の役割に関する研究
—施設へのインタビュー分析を通して—

前田 和代（東京家政大学）

- 3 低年齢長時間保育の子どもたちの精神保健面の育ちへの影響②
—学校生活の諸問題との関連—

菅原 創（江戸川双葉幼稚園、聖学院大学非常勤講師）

- 4 保育を観ることが保育力へ
—保育を観て学ぶ・考える・生かす—

久米裕紀子（武庫川女子大学）

研究発表（口頭発表Ⅰ-3）

12月13日（土） 9：00～10：30

【会場】6204

座長 佐野 美奈（常葉大学）

武内 裕明（弘前大学）

- 1 幼児の音楽的表現における手指の動きの定量的分析：第3中手骨の動きの解析に基づいて

佐野 美奈（常葉大学）

- 2 村石昭三の「ことば」に関する指導の構想について
－保育内容の指導と内容の検討－

武内 裕明（弘前大学）

研究発表（口頭発表Ⅱ-1）

12月13日（土） 10：40～12：10

【会場】6202

座長 猪田 裕子（神戸親和大学）
井辺 和杜（広島文教大学）

- 1 遊びにひらかれる思考の根源構造と教育的可能性
—自発性・脱中心化・信じる心に見る「生成する知」としての遊びの哲学的位相—
猪田 裕子（神戸親和大学）
- 2 関係論的な発達観に関する批判的検討
—アンリ・ワロン及び浜田寿美男による身体論を手がかりに—
井辺 和杜（広島文教大学）
- 3 ドイツ語母語乳児における英語 /æ/-/ε/ 音の聞き分け：横断研究と縦断研究による検証
小寺 博正（京都大学）
- 4 保育施設において保育者が行なうペアレント・トレーニングは
保護者に何をもたらすのか？
玉城美千子（広島大学大学院・あおぞら幼稚園）

研究発表（口頭発表Ⅱ-2）

12月13日（土） 10：40～12：10

【会場】6203

座長 村井 尚子（京都女子大学）
橋本 信子（安田女子短期大学）

- 1 フィードバック型保育ドキュメンテーション教材の開発
ー熟達保育者の学習観に着目してー

戸田 大樹（創価大学）
館 秀典（駿河台大学）

- 2 演劇ワークショップを通じた保育者の専門性の育ち

村井 尚子（京都女子大学）
坂田 哲人（大妻女子大学）

- 3 中堅保育者へのインタビューの可視化による
「保育者1人あたりの子どもの数」についての検討（2）
ー「保育の質」に着目してー

鈴木捺津美（愛知文教女子短期大学）

- 4 保育者のドキュメンテーション観の類型化とその力量形成に関する研究
ー日々の保育を支えるドキュメンテーションをめざしてー

橋本 信子（安田女子短期大学）
矢野 光恵（安田女子短期大学）

研究発表（口頭発表Ⅱ-3）

12月13日（土） 10：40～12：10

【会場】6204

座長 小林由利子（明治学院大学）

木本 節子（学校法人東筑紫学園東筑紫短期大学）

1 演劇的手法による保育者研修プログラムの開発

－「フルーツバスケット」に着目して－

小林由利子（明治学院大学）

2 養成校における学生の資質・能力の育成

－ 体験学修を通した五領域相互の関連性における考察 －

木本 節子（学校法人東筑紫学園東筑紫短期大学）

3 保育実技と保育者のセルフケア

伊藤佐陽子（龍谷大学大学院博士後期課程）

近藤真理子（太成学院大学）

長谷川勝一（美作大学）

4 実習記録について、保育者はどのように考えるのか

－保育実習記録作成に関する指導法に着目して－

三島 秀晃（和洋女子大学）

星野美穂子（和洋女子大学）

松田 聖子（帝京平成大学）

研究発表（口頭発表Ⅲ-1）

12月13日（土） 16：30～18：00

【会場】6202

座長 田中 卓也（育英大学）
相楽真樹子（武蔵野短期大学）

- 1 大正期児童雑誌『童話』に関する読者の研究
田中 卓也（育英大学）
- 2 児童養護施設におけるルールのもとでの子どもの言動とその機能
沖島 歌音（広島大学大学院）
- 3 1930年代の農村部における農繁期託児事業の関心と理解
相楽真樹子（武蔵野短期大学）
- 4 北東北における近代幼児教育の諸相
～岩手県盛岡市周辺の保育・福祉活動を中心に～
丸山ちはや（盛岡大学短期大学部）

研究発表（口頭発表Ⅲ-2）

12月13日（土） 16：30～18：00

【会場】6203

座長 境 愛一郎（共立女子大学）

垂見 直樹（近畿大学九州短期大学）

1 園児の在園時間の違いによる実践上の課題

—初任保育教諭の課題認識の変容に着目して—

蓮井 和也（川崎医療福祉大学）

2 セカンドキャリア保育者の語りにみる保育者と保育現場の様態

境 愛一郎（共立女子大学）

3 保育形態の移行による保育者の意識変容

—10年目を迎えた幼保連携型認定こども園の保育者の語りから—

近藤有紀子（十文字学園女子大学）

栗原 啓祥（清心幼稚園）

4 保育者の行為形成に関する考察

—「出来事の解釈」に注目して—

垂見 直樹（近畿大学九州短期大学）

研究発表（口頭発表Ⅳ-1）

12月14日（日） 9：10～10：40

【会場】6202

座長 野口 隆子（東京家政大学）
上田 敏丈（名古屋市立大学）

1 公立幼稚園におけるリーダーシップ機能に関する研究（2） ーミドルリーダー役割における地域特性・園規模に関する分析ー

野口 隆子（東京家政大学）
上田 敏丈（名古屋市立大学）
棕田 善之（関西国際大学）
秋田喜代美（学習院大学）
門田 理世（西南学院大学）
鈴木 正敏（兵庫教育大学）
中坪 史典（広島大学）
箕輪 潤子（武蔵野大学）
淀川 裕美（千葉大学）

2 公立幼稚園におけるリーダーシップ機能に関する研究（1） ー公立幼稚園の役割と課題ー

上田 敏丈（名古屋市立大学）
野口 隆子（東京家政大学）
棕田 善之（関西国際大学）
秋田喜代美（学習院大学）
門田 理世（西南学院大学）
鈴木 正敏（兵庫教育大学）
中坪 史典（広島大学）

3 新人幼児教育アドバイザーのオートエスノグラフィー

田島 美帆（広島大学大学院教育学研究科）

4 公立保育所と大学による保育の質向上に資する地域連携事業のあり方（1）

渡邊 孝枝（十文字学園女子大学）
横井 紘子（十文字学園女子大学）

研究発表（口頭発表Ⅳ-2）

12月14日（日） 9：10～10：40

【会場】6203

座長 吉田 直哉（大阪公立大学）
辻谷真知子（お茶の水女子大学）

- 1 不適切な保育が発生する要因とその関係構造
—第三者委員会報告書の分析—

濱名 潔（認定こども園 立花愛の園幼稚園・名古屋市立大学大学院 人間文化研究科研究員）

- 2 保育ソーシャルワークの専門性定義の現状

吉田 直哉（大阪公立大学）

- 3 ジェンダーに関する子どもの発言と園職員の反応：自由記述回答の分析から

辻谷真知子（お茶の水女子大学）

高橋 翠（玉川大学）

- 4 沖縄県「5歳児1年保育」の史的展開と就園率の変遷

野原 美幸（広島大学大学院）

七木田 敦（広島文化学園大学）

研究発表（口頭発表Ⅳ-3）

12月14日（日） 9：10～10：40

【会場】6204

座長 渡邊 真帆（福山市立大学）

清水 憲志（中国短期大学 広島大学 大学院・博士後期課程）

1 保育施設の総合遊具における安全確保の実態と設置意義及び課題

—Web アンケート調査による自由記述回答の分析—

根橋 杏美（東京学芸大学 大学院 連合学校教育学研究科 博士課程）

2 日常的移行の時間帯における保育者の経験

—帰りの会から降園までの過程に着目して—

渡邊 真帆（福山市立大学）

3 新たな保育環境の創造により実践の可能性を拓く試み

清心幼稚園におけるフード・アトリエ設置のプロセスから

栗原 啓祥（清心幼稚園）

森 眞理（神戸親和大学）

境 愛一郎（共立女子大学）

4 保育者の視線は援助となるのか

—相互行為の秩序からみる社会的実践—

清水 憲志（中国短期大学 広島大学 大学院・博士後期課程）

研究発表（口頭発表V-1）

12月14日（日） 15：10～16：40

【会場】6202

座長 三木 美香（畿央大学）
守 巧（こども教育宝仙大学）

- 1 「気になる子ども」を通した保育者の子どもへの視点
-「気になる子ども」の事例研究からの検討-

白濱泰一郎（田園調布学園大学協力研究員）

- 2 けんかの対応を「困難」と捉えない保育者のまなざし

三木 美香（畿央大学）

- 3 インクルーシブな保育実践を支える担任保育者とフリー保育者の協働

鈴木 春彦（東京家政大学児童学部児童学科）

- 4 幼稚園教諭が捉えるインクルーシブ保育による定型発達児の効果

守 巧（こども教育宝仙大学）

若月 芳浩（玉川大学）

研究発表（口頭発表V-2）

12月14日（日） 15：10～16：40

【会場】6203

座長 大野 歩（山梨大学）

野澤 祥子（東京大学）

1 保育者の相互理解と同僚性の構築を図るための取り組みに関する一考察

兼間 和美（武蔵野大学しあわせ研究所）

石田由紀子（武蔵野大学しあわせ研究所）

小川 房子（武蔵野大学教育学部 武蔵野大学しあわせ研究所）

2 幼保小接続期教育における小学校教師の実践認識に関する研究 —架け橋プログラム実践への語りの分析から—

大野 歩（山梨大学）

3 3歳児・4歳児クラスにおける保育環境の質に関する探索的検討 —「保育の質と子どもの発達に関する縦断的研究」から—

野澤 祥子（東京大学）

松井 剛太（香川大学）

香曾我部琢（宮城教育大学）

遠藤 利彦（東京大学）

秋田喜代美（学習院大学）

4 研修体験が「研修観の転換」を支え促す可能性についての一考察 -「遊び」を土台に据えた「探究型研修」の取り組みから-

鎌内 菜穂（奈良女子大学附属幼稚園）

研究発表（口頭発表V-3）

12月14日（日） 15：10～16：40

【会場】6204

座長 永島さくら（江戸川学園おおたかの森専門学校）
佐藤 智恵（神戸親和大学）

- 1 2歳児クラスの移行期における行動変化と保育者の援助
—小規模保育施設を対象とした調査から—

永島さくら（江戸川学園おおたかの森専門学校）

- 2 1歳児、2歳児クラスの経験を有する保育者の水遊びに対する認識
—水やモノに対する語りに着目して—

最上 秀樹（学習院大学大学院 人文科学研究科教育学専攻 博士課程後期）

- 3 子どもは乳児の表出をどう理解しているのか

佐藤 智恵（神戸親和大学）

- 4 「いっしょ」を感じる・味わうこどもの姿
～場面や年齢による「いっしょ」の質からのアプローチ～

一色 里絵（平和学園幼稚園 / 田園調布学園大学協力研究員）

村松 直人（関東学院六浦こども園 / 田園調布学園大学協力研究員）

安村 清美（田園調布学園大学）

研究発表（ポスター発表Ⅰ）

12月13日（土） 9：00～10：30

【会場】6210

座長 伊勢 慎（福岡県立大学）

永渕美香子（中村学園大学短期大学部）

1 大阪・関西万博会場に設置されたカームダウンルームの問題点

水野 智美（東京科学大学）

大和田菜子（豊里もみじこども園）

2 発達障害傾向に起因する感覚異常のある子どもに対する保育者の支援2

—保育者の知識及び経験と感覚異常のある子どもへの対応との関連—

大和田菜子（豊里もみじこども園）

水野 智美（東京科学大学）

3 こども園における2歳児クラスから3歳児クラスへの移行

—2歳クラス3学期の予備調査を通して—

松原 未季（大阪信愛学院大学）

4 保育力の向上を目指す取り組み

—記述力を高めるには—

鈴木えり子（華頂短期大学）

5 子育て支援センターにおける価格設定と需要

—利用料はどこまで許容されるのか PSM 分析での検討—

濱名 毅（立花愛の園幼稚園、兵庫教育大学非常勤講師）

濱名 潔（立花愛の園幼稚園）

6 幼稚園における集団保育の難しさに直面して

—園長と幼稚園教諭へのインタビューを通して—

森下 直美（福岡県立大学大学院）

伊勢 慎（福岡県立大学）

7 地域と交流を図るための保育者の初めの第一歩

—何に困って何を得たのか?—

伊勢 慎 (福岡県立大学)

高口 知浩 (純真短期大学)

井手 裕子 (東亜大学)

森下 直美 (福岡県立大学大学院)

8 ネガティブな保育報道が保育士に与える影響 (2)

—充実保育士は報道をどう捉えるのか—

高口 知浩 (純真短期大学)

伊勢 慎 (福岡県立大学)

井手 裕子 (東亜大学)

9 子ども理解につながる読書会の検討1

伊藤 智里 (中国学園大学)

山本 房子 (中国短期大学)

10 拡散的思考を促す絵本ワークショップの実証的研究

山本 房子 (中国短期大学)

伊藤 智里 (中国学園大学)

11 指導が必要な保育者に対する主任の悩みと関わり

永渕美香子 (中村学園大学短期大学部)

研究発表（ポスター発表Ⅱ）

12月13日（土） 10：40～12：10

【会場】6210

座長 勝野 愛子（同朋大学）

内田 千春（東洋大学）

1 発達障害的傾向を持つ保育者の困りごと調査項目の検討

副島 里美（長野短期大学）

2 気持ちの支えは「人間関係」か、「健康」か？

—領域内容にみる情動調整理解の日中文化差—

何 星雨（東京学芸大学）

3 保育者がドキュメンテーションに抱く葛藤

—導入初期に着目して—

平山 淑希（玉川大学大学院修士課程 / 仙台青葉学院短期大学）

4 年少児の関係性の知性の萌芽に関する一考察

—関与観察と保育者の語りに見る、関わりの中での育ち—

勝野 愛子（同朋大学）

5 散歩カートの使用における保育者の困難感

西館 有沙（富山大学）

6 ふり・見立て遊びにおけるオノマトペの働き

—4歳児の自由遊びに着目して—

秋國 郁（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）

7 能登半島地震から展望する就学前教育・保育施設における防災・減災

高橋多美子（岡山県立大学保健福祉学部）

- 8 保育観の共有による人的環境の向上
ー統一メソッド構築の試み
稲田 公子（保育みらい研究所 Compass）
- 9 保育記録にみる記録中の省察と意味づけ
ー保育者の思考モデルの理論的検討と記録の在り方の再考ー
小木曾友則（千葉明德短期大学）
- 10 ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの保育者養成と附属施設の連携から見える
子育て・家族支援
～地区ママ養成講座の意義とその実際～
池谷 潤子（千葉明德短期大学）
- 11 多文化フィールドワーク実践報告
ー体験と対話を通して文化的応答性を育てる試みー
内田 千春（東洋大学）
- 12 令和7年度入学の保育学生（4年制大学・短期大学・保育系専門学校）における
面接を通じた進路指導
田中 卓也（育英大学）
岡部 祐子（徳島文理大学短期大学部）
戸田 大樹（創価大学）
山梨 有子（彰栄保育福祉専門学校）

研究発表（ポスター発表Ⅲ）

12月13日（土） 14：50～16：20

【会場】6210

座長 門田 理世（西南学院大学）

樟本 千里（岡山県立大学）

1 公立図書館における子育て支援の実態Ⅱ

八幡真由美（国立音楽大学）

2 地域子育て支援拠点における「気になる子ども」の保護者支援と拠点内外連携

小田 真実（山口県立大学）

永瀬 開（広島大学大学院）

藤田 久美（山口県立大学）

横山 順一（山口県立大学）

3 地域子育て支援拠点の支援者の専門性

—アンケートの自由記述の分析から—

横山 順一（山口県立大学）

藤田 久美（山口県立大学）

永瀬 開（広島大学大学院）

小田 真実（山口県立大学）

4 発達が気になる子どもの保護者支援と園内外連携

—主任保育士の語りをもとにした一考察—

藤田 久美（山口県立大学）

横山 順一（山口県立大学）

小田 真実（山口県立大学）

山崎 智仁（山口県立大学）

高橋 幾（山口県立大学）

5 子どもの居場所としての園庭環境の検討

—遊びの満足度可視化の試み—

駒 久美子（千葉大学）

香曾我部琢（宮城教育大学）

6 試行的事業から見出すこども誰でも通園制度の課題と留意点

ー施設管理者の語りの分析よりー

田中 文昭（幼保連携型認定こども園 やまなみ幼稚園）

7 低年齢児保育における保育者の認識

～「低年齢児保育の難しさ」に関するインタビューから～

箕輪 潤子（武蔵野大学）

淀川 裕美（千葉大学）

8 中途採用で着任した幼稚園教諭の変容・熟達プロセスの検討

ー学生時代から就職、転職の過程における「断絶の生成」と熟考に着目してー

淀川 裕美（千葉大学）

野口 隆子（東京家政大学）

門田 理世（西南学院大学）

箕輪 潤子（武蔵野大学）

9 保育者にとってのおもしろさとは

ー保育者が用いる「熱量」という言葉に着目してー

藤田 清澄（盛岡大学）

10 協同育児が親のアイデンティティに与える影響

- 未就学の子どもをもつ 母親からの視点を通して -

密城 吉夫（羽陽学園短期大学）

11 ドイツ幼児教育における Bildung と Erziehung の概念をめぐる議論

大道 香織（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

12 主体性を支える保育マインドの形成過程：実践の変化がもたらした気づきと課題

樟本 千里（岡山県立大学）

13 保育実践の再構築に関する研究

ー異年齢保育への移行における主任保育士と担任保育士の語りからー

島田 知和（活水女子大学）

研究発表（ポスター発表Ⅳ）

12月14日（日） 13：30～15：00

【会場】6210

座長 松本 信吾（岐阜聖徳学園大学）

上村 晶（桜花学園大学）

1 誰でも楽しめるスポーツ「ボッチャ」の魅力と今後の展望（Ⅱ）

－幼児教育施設における遊びを通しての保育実践－

上原 由美（新潟青陵大学短期大学部）

古谷 淳（高田短期大学）

板垣 裕（新潟こども医療専門学校）

福岡 龍太（新潟青陵大学短期大学部）

小柳 桃子（新潟青陵大学短期大学部）

2 集まり場面における保育者の視線行動

－多様性を前提とする園の熟練期の保育者に着目して－

広瀬 由紀（共立女子大学）

3 保育施設における排泄の自立に関する研究動向

五十嵐久美子（新潟青陵大学）

4 幼児と自然とをつなぐインタープリターは何を大事にしているのか

－5名のインタビューを通して－

松本 信吾（岐阜聖徳学園大学）

5 保育専門職のワーク・エンゲージメントと保育困難感との関連

－公立園を対象として－

杉本 貴代（愛知大学短期大学部）

6 屋外環境および自然環境下の保育実践と STEAM 教育との関連に関する一考察

－イギリス・ノルウェー・スウェーデンのカリキュラム・保育活動・教材に着目して－

柴田 卓（郡山女子大学短期大学部）

7 スウェーデンのナショナルカリキュラムにおける幼小連携接続に関する記述

矢崎桂一郎（国立教育政策研究所）

8 保育現場におけるノンコンタクトタイムの可能性を探る・2

—幼稚園教諭へのインタビュー調査から—

小久保圭一郎（倉敷市立短期大学）

桐川 敦子（聖徳大学）

山下 佳香（川村学園女子大学）

百瀬ユカリ（日本女子体育大学）

9 明治後期における幼小接続を意識した遊戯教育に関する研究

—高橋忠次郎による遊戯教育論の検討を中心に—

戸江 真以（九州女子短期大学）

10 保育者は子どもとの共主体的な園行事を どのように創り上げているのか

上村 晶（桜花学園大学）

11 粘土遊びが育む子どもの探究心 II

— 保育環境と保育者のかかわりに着目して —

幸田 瑞穂（頌栄短期大学）

12 幼児の自発的なパターンへの着目を促す物的環境

福澤 惇也（中国短期大学）

13 保育実践における発達障害児の「集団所属感」の把握について

—幼児のどのような姿から「居場所があると感じている」と捉えることができるのか—

名倉 一美（佐賀大学）

日本乳幼児教育学会 第35回大会 実行委員会

大会会長	浅野 嘉延	(西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部 学長)
実行委員長	上村 眞生	(西南女学院大学福祉学科准教授・GREEN Child Research Office センター長)
実行委員	青山 優子	(九州女子大学・九州女子大学附属鞍手幼稚園 名誉教授・園長)
実行委員	阿南寿美子	(西南女学院大学短期大学部 保育科教授)
実行委員	伊勢 慎	(福岡県立大学 人間形成学科准教授)
実行委員	金谷めぐみ	(西南女学院大学 福祉学科准教授)
実行委員	子安 崇夫	(九州女子短期大学 講師)
実行委員	笹部 聡子	(東筑紫短期大学 保育学科准教授)
実行委員	末嵯 雅美	(西南女学院大学短期大学部 保育科教授)
実行委員	菅原 航平	(福岡県立大学 人間形成学科講師)
実行委員	田中 沙織	(九州産業大学 子ども教育学科准教授)
運営委員	能美 佳奈	(福岡県立大学 大学院生)
実行委員	本田恵美子	(九州栄養福祉大学・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園 講師・保育部副園長)
実行委員	丸田 敦子	(東筑紫短期大学 保育学科講師)
実行委員	宮嶋 晴子	(九州女子短期大学 教授)
実行委員	山路 麻佳	(西南女学院大学短期大学部 保育科講師)
実行委員	山根 正夫	(西南女学院大学 福祉学科教授)
実行委員／後援団体代表	尾上 正史	(福岡県私立幼稚園振興協会 会長)
実行委員／後援団体代表	高原 恵子	(北九州市私立幼稚園連盟 会長)
実行委員／後援団体代表	万田 康	(福岡県保育協会 会長)
実行委員／後援団体代表	山本 文雄	(北九州市保育所連盟 前会長)
	林田 猛利	(北九州市保育所連盟 会長)
協賛		(公財)北九州観光コンベンション協会
事務局	奥 尚子	

日本乳幼児教育学会 第35回プログラム

発行日	2025年12月
発行者	日本乳幼児教育学会第35回大会実行委員会
実行委員長	上村 眞生
作成	名鉄観光サービス株式会社 仙台支店

日本乳幼児教育学会 第35回大会 協賛団体ご芳名

(五十音順・敬称略)

株式会社エイデル研究所

株式会社かせき

株式会社 北大路書房

教育情報出版

株式会社ソニー・インタラクティブエンタテインメント

公益財団法人ソニー教育財団

中央法規出版株式会社

株式会社 東京教学社

大会を開催するにあたり、上記機関・企業・団体等より多大な賛助や広告掲載をいただきました。

ここにそのご芳名を記して、心より感謝の意を表します。

2025年12月吉日
実行委員長 上村 眞生

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

<https://www.kitaohji.com> (価格税込)

レッジョ・エミリアのアートと創造性

ー保育におけるアトリエの役割と可能性を探るー
ヴェア・ヴェッキ著 森 眞理, 刑部育子監訳 A5・368頁・定価4620円 アトリエリスタとして、レッジョ・エミリアの実践を支え続けてきたヴェア・ヴェッキ氏が歩んできた道のりをもとに、アートや創造性が保育にいかに関与し得るのかについて、自身の回想と仲間たちとの対話を通して探究する。

子どもをあらわすということ

青山 誠, 三谷大紀, 川田 学, 汐見稔幸編著 四六・272頁・定価2530円 なぜ、子どもをあらわすにはいられないのか。子どもに耳を傾け、記述し、写真に撮るなど、共に過ごした記録として様々な方法であらわそうと試みる。そこには何があらわれるのだろうか。何のためにあらわすのだろうか。保育という営みのなかで子どもをあらわすことの意味を探る。

「愛と知の循環」としての保育実践

ー多様で豊かな世界と出会い、学び、育つー 無藤隆, 古賀松香, 岸野麻衣編著 B5・224頁・定価2750円 無藤隆氏が導き出した「愛と知の循環」という幼児教育論。この理論の背後には、これまで行ってきた膨大な観察と子ども・保育者・研究者たちとの対話がある。これらを通して紡がれてきた理論に基づく実践とは。9つの園の実践事例を通して描き出す。

保育における倫理と政治

浅井幸子監訳 今冬発刊予定 本書は、「保育の質評価」を中核とする英米の保育の言説に警鐘をならし、議論のオルタナティブを提供する。とりわけ、英米の言説が倫理的・政治的实践であるはずの保育を技術的实践に還元してしまうことを批判し、レヴィナス、フーコー、ドゥルーズなどの議論をふまえながら、保育の倫理学／政治学を構想している。

ASDを共に生きる

ー共事者として子どもの〈生きる様〉をエピソードで描くー 頼 小紅著 鯨岡 峻解説 A5・336頁・定価3300円 「ASDを抱えて生きるとはどういうことか」という新たな問いを立て、その問いに答えるために一人のASD児を取り上げる。3年にわたるエピソード記述から、「ASDを抱えて生きる」ということを、共事者として描き出す。

大豆生田啓友対談集 保育から世界が変わる

大豆生田啓友著 木村明子聞き手 A5・240頁・定価2200円 【対談者】渡邊英則, 無藤隆, 苫野一徳, 山口慎太郎, 明和政子, 村上靖彦, 荒牧重人, 秋田喜代美 子どもたちの未来のために、保育・幼児教育の枠を越えて、多様な領域の研究者たちと「子どもをまんなかに置いて」語り合う。

愛と知の循環としての保育

無藤 隆著 今冬発刊予定 保育とは「愛と知の循環である」——数十年にわたり日本の保育・教育界をリードし続ける無藤隆氏の集大成。知的な関わりと情動的な関わりが循環的に発展するというあり方、その実現が保育・幼児教育の要であるという「愛と知の循環」論をはじめ、これからの幼児教育・保育の理論的基盤を構築するための30章。

レッジョ・エミリア いまここにある歴史

森 眞理, 小玉亮子監訳 今冬発刊予定 世界の幼児教育に影響を与え、人々を魅了し続けるレッジョ・エミリア。しかし、実践の「美しさ」ゆえにビジネスに利用される弊害もある今、改めて本質の理解が求められてきている。レッジョ・エミリアの実践の背後にある歴史・哲学・文化等について豊富な写真と共に詳説することを通して、その本質に迫る。

子どもの遊びを考える

佐伯 胖編著 定価2640円

子どもの声からはじまる 保育アセスメント

松井剛太, 松本博雄編著 定価2860円

子どもが育つ 保育内容「健康」

無藤 隆監修／松寄洋子編著 定価2420円

生命と学びの哲学

久保健太著 定価2200円

絵本で実践！ アニマシオン

木村美幸著 定価2420円

子どもが育つ 保育内容「表現」

無藤 隆監修／吉永早苗編著 定価2420円

子どもはいかにして文字を習得するのか

松本博雄著 定価3300円

子どもが育つ 保育内容「人間関係」

無藤 隆監修／古賀松香編著 定価2420円

子どもの権利と 保育内容総論

森 眞理, 猪田裕子編著 定価2420円



これまでの枠を超えれば「ワクワク」がみえてくる 空間・時間・人を広げる 保育環境の構成

境 愛一郎＝編著、栗原啓祥、濱名 潔＝著

定価 2,420円(税込) AB判・132頁 2025年3月発行 ISBN978-4-8243-0192-5

空間・時間・人の三つの観点から既存の枠を広げることで、子どもの好奇心・探究心の「ワクワク」が深まった事例を通して環境構成のあり方を考える。通園バスの過ごし方、土曜保育、調理員や用務員の活躍などを紹介し、環境構成を考える研修等でも活用できる一冊。



こえ わたしの声をきいて

●シリーズ全5巻 ●定価 各3,520円(税込) ●AB判・上製

さまざまな状況にある子どもたちのことを「本人の声」の形で紹介する、小学校低学年向けの絵本シリーズ。巻末では、当事者の子どもが困っているときどうすればよいのか、まわりの子どもはどう接したらよいのかを子どもたちにわかるように説明している。大人向けの解説ページもあり、授業や読み聞かせにも活用できる。



外国にルーツのある
子どもが
知ってほしいこと

●吉富志津代＝監修
●32頁
ISBN978-4-8243-0236-6



学校に行くのが
つらい子どもの
気持ち
【不登校・登校しぶり】

●石井しこう＝監修
●36頁
ISBN978-4-8243-0237-3



家族のお世話を
している子どもの
本当の気持ち
【ヤングケアラー】

●野尻紀恵＝監修
●36頁
ISBN978-4-8243-0238-0



病気や障害のある
兄弟姉妹がいる子どもが
思っていること
【きょうだい児】

●藤木和子、
柳田めぐみ＝監修
●32頁
ISBN978-4-8243-0239-7



医療的ケアが
必要な子どもの
気持ち

●一般社団法人日本
医療的ケア看護職
員支援協会＝監修
●36頁
ISBN978-4-8243-0240-3

保育士養成・幼稚園教諭養成テキスト

●定価 各2,420円(税込) ●B5判・各100～200頁 ●2025年3・4月発行
教職課程コアカリキュラム／モデルカリキュラムに準拠したテキストシリーズ。



教育課程論

「育みたい資質・能力」につながる
カリキュラムに焦点を当てて

神長美津子、津金美智子、河合優子、塩谷 香＝編著
ISBN978-4-8243-0195-6



幼児理解の理論と方法

発達や学びの過程に生じる
「つまずき」に焦点を当てて

神長美津子、岩立京子、岡上直子、結城孝治＝編著
ISBN978-4-8243-0197-0



子どもと表現

応答性豊かな保育者になるために

島田由紀子・駒 久美子＝編著
ISBN978-4-8243-0183-3



保育・教職実践演習

学びの軌跡の集大成を目指して

神長美津子、田代幸代＝編著
ISBN978-4-8243-0196-3



子どもと環境

子どもの感性をひらく
保育者のかかわり

神長美津子、高柳恭子、桂木奈巳、青木康太郎＝編著
ISBN978-4-8243-0198-7

新刊

マンガと事例でポイントをつかむ 幼児教育・保育方法論

編著 開 仁志

カラー口絵付

ISBN 978-4-909378-72-9
B5判・176頁 税込定価 2,310円

あなたとともに考える 子ども家庭福祉

こどもまんなか社会を実現するために

編著 渡邊 慶一

978-4-909378-68-2
B5判・184頁 税込定価 2,420円

保育の心理学

ー子ども理解をケアにつなげるー

編著 串崎 幸代

978-4-909378-70-5
B5判・176頁 税込定価 2,310円

哲学的な考えをいかす 新・教育原理

ー教育と保育を考えるー

編著 伊藤 潔志

978-4-909378-71-2
B5判・176頁 税込定価 2,310円

好評既刊

子ども家庭支援論【第2版】

ー子どもを中心とした家庭支援ー

編著 七木田 敦・上村 眞生・岡花 祈一郎

978-4-909378-78-1
A5判・192頁 税込定価 2,090円

実践事例を通して具体的ななかかわりを学ぶ 保育現場における特別支援

編著 松井 剛太・七木田 敦

978-4-909378-49-1
B5判・176頁 税込定価 2,200円

乳児保育【第3版】ー子ども・家庭・保育者が紡ぐ営みー

編著 入江 慶太

978-4-909378-54-5
B5判・200頁 税込定価 2,497円

新・子育て支援 子どもの姿を喜びに変えるために

編著 松井 剛太

978-4-909378-34-7
A5判・184頁 税込定価 2,000円

児童文化がひろく豊かな保育実践

編著 中坪 史典

978-4-909378-41-5
B5判・176頁 税込定価 2,724円



図書出版・販売

教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南 1-18-24
TEL 06-6658-8741 (代) 06-6651-5012 (編集部)
FAX 06-6652-2928



info@kyoiku-joho.jp
http://www.kyoiku-joho.jp